2023 年度

国際社会実習報告書

インドネシア／インド／香港

高知大学人文学部 国際社会コミュニケーション学科 / 高知大学人文社会科学部 人文社会科学科国際社会コース

2023年度

国際社会実習報告書

国際社会実習報告書
2023年度

【Contents】

発刊にあたって …… 01

令和５年度「国際社会実習（オンライン海外調査実習）」の実施について……今井　典子…… 02

日本語を教える難しさ－ブラビジャヤ大学での実習を通して－……浜田　健成…… 08

国際社会実習を終えて……藤丸　知世…… 11

国際社会実習　報告書……百々　　遥…… 14

国際社会実習を終えて……三木　花梨…… 16

Report on 2023/24 Guided International Field Study Course …… 19

English and Malayalam in India:The Relationship Between
English and Native Language in an ESL Country……Miu Kubokawa …… 28

India Research Reflection ……Mami Fujiwara…… 33

India Field Research Report ……Kaho Numoto …… 38

From Malayalam to English:Understanding Language
Shift in Kerala, India ……Lee Peihsuan Maggie … 43

香港スタディツアーについて……文責：高橋　俊…… 50

香港スタディツアー……桑村　美咲…… 51

香港 ST 成果報告 ……山口　明夏…… 52

現存する遺物から考える九龍城砦の歴史……岩佐優希実…… 53

香港スタディツアー……美濃　里沙…… 54

香港の転向貿易について……シン　暁霞…… 55

発刊にあたって

高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース 2023 年度国際社会実習報告書をお届けします。2020 年度 -2021 年度コロナ禍での実習不開催を経て、2022 年度に 3 年ぶりに実習が再開されましたが（2022 年度 1 件）、2023 年度は 3 件実施され、ようやく活気が戻ってきた感があります。ここで各実習の取り組みについて紹介します。「オンライン海外調査実習」（オンライン実習プログラム）は 2022 年度に新たに構築された制度で、学生が自身の興味や関心がある分野について海外大学との連携を通じて実践的な学びを深めることを目指しており、2023 年度はインドネシアブラビジャヤ大学の文化学部で日本語を学ぶクラスを実習先とし、参加学生 4 名が様々な教育活動に関わりました。

Field Study of English Language Use in India では、特定の研究テーマを持つ学生に海外フィールドワーク経験を提供するとともに英語力や研究能力を鍛えることを目標とするもので、4 名が参加し、語学力不足や感染症のチャレンジがありつつも 10 日間のフィールドワークに熱心に取り組み成果を得たことが報告されています。

最後に「香港スタディツアー」では、5 名の学生が参加し、激動の最中にありこれからも変化し続けるだろう香港の今をどのように見て感じたのか、報告されています。ぜひご一読ください。

国際社会実習は、実習内容や実習先、レベルに応じて、以下の 5 つがあります。国際社会コース開講の授業ですが、コースの枠、学部の枠を越え全学に開かれた科目となっています。

スタディ・ツアー　外国語実習　国内調査実習
海外調査実習　フィールド・リサーチ

こういった機会を通して、リアルな体験、当たり前が当たり前ではないことを知る経験、見たことのない景色を見る機会を、ぜひ多くの学生に得てほしいと思います。

最後に、本報告書の刊行にあたり、人文社会科学部長裁量経費から補助を受けました。感謝申し上げます。

2024 年 6 月

高知大学人文社会科学部
人文社会科学科国際社会コース長
古 閑 恭 子

令和５年度
「国際社会実習（オンライン海外調査実習）」の実施について

人文社会科学部 国際社会コース
今井　典子

はじめに

「国際社会実習」を海外で実施するのではなく、オンラインで実施しようと考えた着想の経緯は、コロナ禍による渡航制限の状況にあったことに加え、2022 年度１学期、シドニーのマッコーリー大学 (Macquarie University：つ MU) から、２名のオンラインインターシップ生を受け入れた経験にある。このインターンシップは、MU の単位付与の Professional and Community Engagement (PACE) プログラムであり、学生は現地に滞在することなく社会で必要な実践的スキルを学べるのが特徴であるとされている。受け入れた MU の学生へは、英語関連における高知大生への支援をお願いした。2021 年度と 2022 年度の PACE プログラムにより複数の学生の受け入れを通して、双方の学生への教育効果の可能性を実感できた。その経験を踏まえ、2022 年度に高知大学に適した単位取得可能な専門科目の制度を新たに構築し、そして準備期間を経て、2023 年度２学期に実習が実現した。

1.　実習の趣旨

本オンライン実習プログラムは、学生が自身の興味や関心がある分野－特に日本語教育や語学教育－について、海外の大学との連携を通じて実践的な学びを深めることを目指している。具体的には、協力校の日本語クラスの授業支援、日本語担当教員のアシスタント業務、日本語学習者への支援など実践的な経験を積む機会を得ることができる。さらに、参加学生は自身がリサーチしたい内容を協力校で実施することも可能である。体験を通して参加学生は、社会で求められる主体性、自律性、計画力、実行力、課題発見力などの能力を向上させ、将来のキャリア構築につなげることが期待される。また、自習校によっては、日本語のみならず、英語などの第二言語を用いて協力大学の担当者や学生たちとのコミュニケーションを図ることが求められるため、語学運用能力の向上が期待できる。特に、アジア圏での実習で英語使用が求められる場合は、世界にある多様な英語（World Englishes）に触れる良い機会となる。今後一層、グローバル化が進展すると、母語を共有しない者同士で英語でコミュニケーションを行うことがむしろ多くなると考えられるため、多様性を体感し、理解する貴重な経験となる。さらに、協力校の学生たちには、日本文化のみならず高知を知ってもらう機会ともなり、また、高知大生は協力校の国の文化を知る機会となり、留学など今後の活発な国際交流に展開することが期待される。

2.　国際社会実習の概要

2.1　実習に向けて

実習への参加に向けて、７月19 日（水）と 26 日（水）の２回説明会を実施した。当初、実習

先として、ブラビジャヤ大学（インドネシア共和国)、ティラク・マハラシュトラ大学（インド共和国)、ハノイ貿易大学（ベトナム社会主義共和国) の 3 大学を実習先として資料に基づいて紹介した。ブラビジャヤ大学（Universitas Brawijaya：UB）については、2023 年 3 月に、文化学部 (Faculty of Cultural Studies) を訪問し、高知や高知大学の紹介と共に実習の概要を説明し（使用資料の抜粋として資料 1 参照)、協力を依頼をすることができていた（写真 1・2 を参照)。他の 2 大学とは、メールを通して、依頼文書も含めやり取りをして進めていた。
説明会に参加した 4 名全員から本実習への参加申し込みがあり、そして皆、ブラビジャヤ大学を希望した。実習開始前の 9 月 29 日（金）11：00（インドネシア時間 9：00）より、2 名の UB の担当教員（Santi Andayari 日本語学科長と Ni Made Savitri Paramita 先生）と Zoom で打ち合わせを行った。この会議では、最初の 30 分で教員間の打ち合わせを行い、次の 20 分間で参加学生との顔合わせ（自己紹介など)、最後の 10 分で確認事項を話し合った。その後、授業開始まで、UB の教員と学生間でメールや Line などを通じて連絡を取り合い開始に向けて準備を行なった。実習内容は、UB の文化学部で日本語を学ぶ学生への日本語指導に関わる内容に決まった。

写真 1　文化学部の教員の方々と（2023 年 3 月）

写真 2　文化学部長と（2023 年 3 月）

2.2　実習の概要

1）対面事前指導（3 時間）

参加学生全員のスケジュールを調整し、一致する時間帯を通常の時間割に設定することが困難であったため、10 月 10 日（火)、11 日（水)、10 月 17 日（火)、18 日（水）の 4 回、昼休みの時間帯を利用して事前学習会を実施した。内容は、実習の目的と概要の確認、および参加学生からリサーチした内容を発表してもらった。プレゼンテーションの内容は、インドネシアの教育、ブラビジャヤ大学に関する情報、日本（高知）とインドネシアの関係や比較についてであった。この事前指導には橋本由紀子先生にもサポートをいただいた。

2)オンライン実習（50 時間）

ブラビジャヤ大学の文化学部で日本語を学ぶクラスは、1 年生が 5 クラス、2 年生から 4 年生までが各 4 クラス（A ～ D クラス）に分かれている。本実習では 1 年生から 3 年生のクラスにそれぞれの学生が参加した（表 1 参照)。実習期間は UB の定期試験後の 11 月 7 日（火）から 2024 年 1 月 12 日（金）までであった。この期間に、参加学生は様々な教育活動に関わり、

最終日には教育実習の成果を発表する会が開催された（表２参照）。実習期間中、多数のBU教員にご指導いただき、無事に実習を終えることができた。

表１　実習の担当クラス

所属クラス	A	B	C	D
学生氏名	浜田 健成	藤丸 知世	百々　遥	三木　花梨
所属と学年	国際社会コース（4年）	国際社会コース（2年）	国際社会コース（2年）	国際社会コース（2年）

表２　実習の内容（ブラビジャヤ大学より提供資料より）

	実習内容	時間	頻度	総時間
1	聴解－会話授業見学（3年生）	2	2	4
2	聴解－会話講師・準備（3年生）	3	2	6
3	読解―作文授業見学（2年生）	2	1	2
4	読解―作文２講師・準備（2年生）	3	1	3
5	聴解教材収集（3年生）	5	2	10
6	読解教材収集（3年生）	5	2	10
7	会話会・準備（1年生）	4	2	8
8	ゼミ・準備	6	1	6
9	教育実習発表（2024年1月12日）	1	1	1
		TOTAL		50

3)対面事後指導（7時間）

事後指導の主な目的は､実習を通じて得た経験や学び､そしてそれらをどのように将来のキャリアに活かすかについて深く振り返ることである。具体的には、参加学生が実習内容、取り組んだ活動、学んだこと、見出した課題、およびそれらの課題に対する今後の対応策についてプレゼンテーションを行った（報告の様子は写真３を参照）。プレゼンテーションの各セッションの後には、質疑応答の時間を設け、２名の教員（橋本由紀子先生を含む）からの質問やコメントがあった。以下に、それぞれの発表に関しするコメントの一部を記している。

・三木さんの報告では、模擬授業において、視覚的なイラストの使用と文字情報の簡潔化をするなどの工夫が示されていた。ブラビジャ大学生が楽しく日本語を勉強できることに焦点を当て、楽しみながら授業を進め、学生の長所や肯定的な部分を見つけ活かすという工夫が感じられた。見出した課題の一つとして、実習前に、自文化と相手の文化を十分理解しておくことの必要性が挙げられていた。大変重要な視点であると言える。

・藤丸さんの報告では、参加した授業を簡潔に説明し、この経験を今後のキャリアにどのように生かしたいか、また、予期せぬ出来事に対しても臨機応変に対応できたことも述べられていた。事前学習の際に、短期間で知り合いのインドネシア人を対象に事前調査やアンケートなどを実施し、それをもとに計画的に実習に取り組めていたことがわかる。

・浜田さんの報告では、他の学生と同様に、授業参加の様子が簡潔に紹介されていた。予期せぬ出来事にも臨機応変に落ち着いて対応できていた。インドネシアの教育事情に関して調べたこともまとまっており、教育への関心の高さが示された。
・百々さんの報告では、日本語教授法の基礎を実習で改めて実感したようであった。事前準備の重要性や、授業で使用する例文を多く準備することの大切さなど、彼女が得た多くの学びが理解できる。また、実習後には、学びで得た経験を生かし、国際交流基金日本語パートナーズの短期派遣に応募し、春休みにインドネシアに行くなど、次のキャリアにつなげていることが評価できる。

事後指導の最終段階として、学生はこの経験に基づく報告書を作成した。

三木さん

藤丸さん

浜田さん

百々さん

写真３　　報告会・審査会の様子（２月８日・９日実施）

おわりに

今回の国際社会実習後、本年度の振り返りと共に、次年度の取り組みを話し合うため、2024年３月18日～20日に、ブラビジャヤ大学を訪問した（写真４参照）。訪問中には、実習に対する貴重な感想や意見をいただき、これらを2024年度の実習プログラムの改善に活かしたいと考えている。

特に、学生との連絡のスムーズな取り方等、実習への課題も明らかになったため事前のオリエンテーションの際に徹底させたい。学生にとって、今回のオンライン実習を通じて得た経験や学びは非常に価値があり、これを対面での日本語教育実習やブラビジャヤ大学との協定校留学へとつなげることができれば、さらに充実したものになると考えられる。次年度に向けて、これらの経験を基にした改善と取り組みを進めていきたい。

写真４　　2024 年 3 月 19 日　文化学部長はじめ、教員の皆さんと

謝辞

この度の実習に際して、ご協力いただきましたブラビジャヤ大学の関係者の多くの皆様に、心より感謝の意を表します。2023 年 3 月および 2024 年 3 月の二度にわたる訪問では、直接お会いし対話の機会を賜り、貴重な意見交換をさせていただきました。このような経験は、実習の質を高める上で非常に重要であり、深く感謝しております。

Contents of 'OIPPO'
Online International Practicum Program Overseas

(Full implementation from the second semester of 2023)
(fall)

➢ Objectives of OIPPO

✓KU Students learn practically about their field of interest at an overseas university.
(Japanese language education or Japanese culture)

✓KU Students will improve their abilities to take the initiative and execute tasks, strengthen their problem-solving and planning skills, and develop their creativity.

The length of time:

➢Pre-study including orientation at KU (3 hours)
➢50 hours of online practical training at the cooperating university
➢Post-study (including report writing) at KU (7 hours)

60 hours (2 credits) by Kochi University

Duration: one semester

KU has a two-semester system.
➢The 1st semester
→ early April ~early August
➢The 2nd semester
→October 2 (2023) ~ early February
(with a two-week winter break in between)

Implementation method: Use of online tools
(e.g., Zoom and Teams)

Content:
✓Japanese language education
(Japanese conversation partners, support for the production of teaching materials)
✓Japanese culture
(presentations for seminars on Japanese culture and history)

<e.g.>
・Orientation: 1 hr
(talking with a Kochi University student about the content of the tasks each other)
・Preparation of Japanese reading materials (with illustrations and photos) on Japanese culture: 5 hrs
・Introduction to Japanese culture (presentation):
preparation and meeting (3 hrs)
presentation and Q&A (2 hrs)
→ 2 sessions with different themes (5 hrs ×2 sessions = 10 hrs)
・Conversation support in Japanese (outside the class) for 25 students (25 hrs)
・Online participation in Japanese classes and support for the teacher in charge
(2 hrs per session including meetings ×4 = 8 hrs)
・Feedback: 1 hr

日本語を教える難しさ
－ブラビジャヤ大学での実習を通して－

人文社会科学部 国際社会コース４年
B201G263R　浜田　健成

はじめに

国際社会実習において、今回はブラビジャヤ大学に在学し、なおかつ日本語の科目を履修している学生に対して、オンラインで日本語指導を行った。この実習における個人の目標として、大きく２点を設定した。１つ目は、「母語を教える活動を通して、日本語を客観的に捉える」こと、そして２つ目は、「日本語教育を通じて言語教育を考える」ことである。筆者は中学・高校の英語科教員免許取得過程を履修しており、今回の実習を通して日本語教育はもちろん、英語教育、また言語教育全体を考え、自らの研究に活かしたいと考えた。主な実習概要と流れ、そして結果を述べていく。

1.　ブラビジャヤ大学における日本語教育

ブラビジャヤ大学は、インドネシアの公立大学であり、様々な学科や講義が展開される中で、日本語教育も盛んに行われている。主に授業を行うのは、インドネシア出身で日本に留学経験のある、日本語が話せる教授を中心としているが、日本人の教員も２名在籍しており、学生たちは自然な日本語に多く触れながら日々学んでいる。ブラビジャヤ大学では教科書を用いた授業を行なっており、その内容は主にそれぞれのシュチュエーションに応じた表現を教材として取り扱っている。実際の例については、実習内容が実践事例となるため、次章で述べていく。

2.　実習内容

今回筆者が担当した授業は、文法学習を主とした「会話講師」、そしてリスニングを主とした「聴読講師」の２コマ、そして全体での「ゼミ」である。ゼミ以外の２コマの学習単元は共通して「提案」する内容であった。教科書内の会話例を用いて学習を進める流れである。会話例は、家族間、友人間、そしてビジネスにおける上司部下の間など様々な場面での例が示されていた。学生は会話例のほとんどの語を理解できていたが、一部理解が難しい語については、言い換えるなどして解説を行った。現地の学生の学習状況や普段の授業の進め方については事前に共有されていたが、実習当日の授業の構成や進め方などはこちらに一任されていた。解説時にパワーポイントなどで図を提示する方法も考えたが、普段は教科書のみを用いていたことから、今回も同様の方法で実施することにした。しかし、そのままではなく、その語がもつ役割ごとに色付けを変えるなど工夫して構成した。

１回目の「会話講師」では、まず事前準備として教科書の学習範囲のページ内に、現地の学生たちがすぐに理解することが難しいと予測される語にマークをした。そしてその語を別の単語や表現に変えたメモを加えた。またそれ以外の語についても、その語がもつ役割ごとに色付けを行った。例えば、主語は赤、動詞が青など視覚的にわかりやすくなることを心がけた。実

習当日はこの書き込んだ教科書をスクリーンに投影する形で授業進行を行った。

２回目の「聴読講師」では音声が主だったため、準備としては音声を全て確認し、分かりにくい語彙をチェックし、言い換え表現を考えまとめることを行った。教科書は回答を記入するページのみだったため、そのまま用いた。

３回目の「ゼミ」については、学生との自由会話が主であったため、特段準備することはなかった。

これらの準備を経て行った実習授業の様子とその結果について、次で述べていく。

3.　実習の様子・成果

まず、１回目の「会話講師」では結果的には準備不足と構成自体のミスが目立った。まず準備に関しては、分からないと推測される単語の選択がどうしても日本人からの視点となり、「これは分かるだろう」と思っていた語彙の意味を質問され、回答に困ってしまうなど学習者の視点に立った準備が不足していた。また、構成に関しては教科書の内容を時間内ほぼピッタリで学習する予定となっており、解説や説明が大半の時間を占めることになってしまった。本来であれば、実際に単元の表現を用いて自由に文を作成し、発表し合ったり、会話練習を行ったりできることが理想であったが、説明することに重点を置きすぎてしまい、学生はただ聞くのみの授業となってしまった。そのため、後半では何人もの学生が退屈する様子が見受けられた。最終的に、残り 10 分を急遽会話の時間にしたが、急な授業構成の変更に、学生たちも戸惑っている様子であった。この結果を受け、学生に自活的に話す機会を設けられるように、構成を改善した。

２回目の「聴読講師」については、前回の改善を踏まえ学生に発言をさせる構成とした。この時間はリスニング形式で問題を解いていく授業で、音声を状況に応じて１～２回聞かせたのち、学生を１名指名し、回答の答え合わせと余裕があれば、その表現を用いて単文を作成してもらった。全体的な結果としては、会話講師に比べると学生たちの取り組み状況も良く、生き生きとした学習となった。これは言語学習に限らず、授業に主体的に参加しているという意識があると授業の雰囲気も変わってくるのだなと感じた。また、音声中の分からなかった語彙の質問についても、念のため事前に主語や動詞など基礎的な語彙の言い換え表現も考えていたことから、スムーズに対応できた。ただ、全員がそれぞれ個人で Zoom に入室するという授業形態だったため、一緒に話し合う活動があまりできなかったことが課題となった。

３回目の「ゼミ」は自由会話が主であった。現地の学生から日本語で様々な質問をもらった。約２時間程度であったが、時間いっぱい多くの学生から日本の大学生活や、部活、また社会情勢など様々な分野での質問が寄せられ非常に充実した時間となった。ここでは、日本語を「教える」ことはなかったが、日本語を用いて実際に使用してみることで言語教育の楽しさを共有できた。

4.　実習を通して

今回の実習を通して、得られたことはたくさんあった。まず個人目標の中にもある「日本語を客観的に捉える」ことに関しては、ある程度達成できたと感じた。それは、準備の過程で言

い換え表現を考えているとき、表現の多さや細かなニュアンスの違いにより意味が大きく異なるため、イントネーションや使い方の難しさを改めて痛感した。そして学習者の視点で考えてみたとき、それを理解するために自国の文化や語彙と置き換えることが独自の文化と言語を持つ日本語の場合はかなり難しいと感じた。

また「言語教育全体を考える」という部分では、英語教育に活かせる点をいくつか発見した。まず、本稿で何度も述べた「言い換える」こと。これは英語教育においても非常に効果的と考えられる。英語にも日本語ではどうしても訳せられないものや、発音ができないものが多々ある。これは先述したように、文化や言語の特性によるものである。それをそのまま理解しようとすると難しく感じるが、近い表現や発音に置き換えることで、少しでも理解が促されるのではないかと感じることができた。

このほかにも様々な発見があったが、１番大きな学びは現地の学生の学ぶ姿勢や意欲、そして目的である。ブラビジャヤ大学の学生は日本語を学ぶモチベーションが非常に高く、学習も前向きであった。理由を学生に聞いてみると、多くの学生が日本語を用いて何かをしたいという言語学習の先に明確な目標があった。このように言語を用いた目標や目的があれば、それが大きなモチベーションとなることを、実習を通して肌で感じることができた。

おわりに

今回の実習で行った日本語教育は、この授業を履修していなければ関わることがなかった分野であると考えている。しかし貴重な体験をする中で新しい学びも多く、それが新たな視点となった。特に先述したモチベーションについては、現在の日本の英語教育には必要な要素である。現在の中高生は、受験に向け「英語を理解する」ことが目的となっていることが多いと思われる。しかし英語を理解した先に明確な目標を持つことができれば、ブラビジャヤ大学の学生のように高いモチベーションのもと学習ができ、英語力の向上も期待できると筆者は考えている。これらの経験を生かして、今後の英語教育に少しでも貢献できるよう、学びを深めていきたい。

国際社会実習を終えて

人文社会科学部　国際社会コース　２年
B221G263S　藤丸　知世

1.　実習内容

実習内容は以下の５つである。インドネシアの事前学習、会話の授業見学と講師、作文添削、会話会での日本文化の発表、聴解授業見学、聴解模擬授業である。インドネシアの事前学習についてはブラウィジャヤ大学の学生が日本語、日本についてどのような興味があるのかを友人を通じて調査した。会話の授業見学、講師については会話の授業をオンラインで見学し次週、講師を他の高知大生と２人で行った。作文添削については作文の授業が中止になったため、自ら申し出て30名の生徒の日本の時事に関する作文を添削した。会話会の日本文化の発表では事前学習した情報をもとに日本文化のでき方についてやさしい日本語で発表した。聴解授業模擬授業は高知大生が聴解授業の模擬授業を作り５分程度で一部実演、授業の流れの説明をするというものである。

2.　実習を通して学んだこと

学んだことは大きく３つある。異文化間コミュニケーションの対応とオンライン授業の難しさと作文添削についてである。

異文化間コミュニケーションについては特に自由度の違いである。具体的に私たちが見学する授業にもかかわらず先生が「会議があるから好きにやっていてください」とすぐにZoomだけ立ち上げて退室したことがあった。予想外のことで、その時は日本について聞きたいことがある人は話したり、問題を解いていて分からないとこがある人に関しては対応したりするという時間に変更した。このように海外で活動する場合、生じる予想外の出来事の中、自分でどうにかする力が求められるということを実感した。ここから見つかった課題は事前確認が不足していたことである。担当の先生と一緒にその時間自分はどのような動きをすべきなのか確認して内容が分かっていれば準備できたと思った。

次にオンライン授業の難しさについては会話授業に講師で参加した時、音声が聞き取りづらいこと、そしてインドネシア側のパソコンが１台しかなく全員の表情が見えにくかったということが授業をするうえで難しい点だった。例文を読んでもらったり、会話の発表をしたりしてもらったが、聞き取りにくいときもありフィードバックが難しい時もあった。また表情が確認しにくいことで、理解しているのかそうでないのかを判断するのが困難だった。ここから見つけた課題は、表情で判断するのではなく常に「ここまで分かりますか」の声掛けをする必要があると思った。また手を挙げてもらうなど工夫が必要だった。さらに上記も同じようにPCが何台用意できるのかの確認が必要だった。

最後に作文添削である。Googleクラスを使って提出された約30名の作文を添削した。これは作文の授業が中止になったためこちらからその代わりに添削をさせてほしいと申し出たものになる。この時、点数をつける基準や誤用の種類分けに時間がかかった。点数をつける際、間

違いの種類を次のように分類した。意味が分かるが助詞や漢字を間違えているものと、意味が分からなくなっているものである。さらにこれら部分的な間違いに加えて、文章の一貫性についても確認した。最初と最後で主張が違う場合には、コメントを付けて学習者に分かりやすく説明を加えるようにした。ここから見つかった課題は、コメントを書く際必要事項をまとめるだけではなく、やさしい日本語を心掛ける必要がある。またそれに時間をかけすぎないことも必要だと感じた。今回の作文添削では 30 名のうち 10 名は発表会のためその日中に添削する必要があった。しかし、コメントを添えたり、日本語が違う状態で文章の一貫性の判断をするのに時間がかかった。

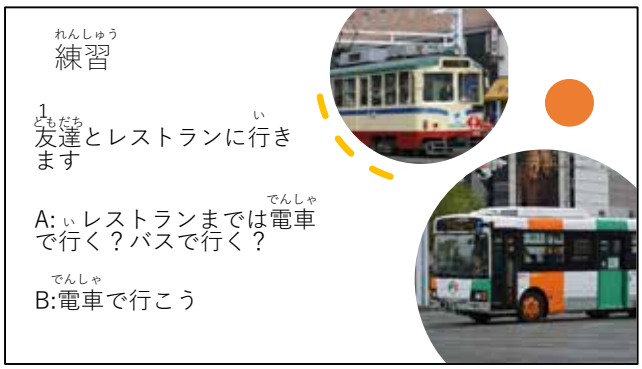
3.　今後に今回の経験をどのように生かしたいか

今回の経験を今後の日本語教師のキャリアにつなげたいと思う。特にオンライン授業に関しては、これから発展していく分野でもあるため、オンラインツールや教授法に関しても新しい情報を得るとともに、今回発見した課題の改善にも努める。今回のような多数の生徒がいる場合は事前に PC を用意してもらい、使用するオンラインツールのダウンロード、動作確認をしてもらうことや、板書代わりの PPT の共有を事前にしておくのはお互い作業しやすいとも感じた。さらに一回一回の授業で学生に振り返りフォームを記入してもらえば、次回授業を作る時に参考になると思った。また実習に関するのインドネシアの先生との連絡のやり取りは、日本人の先生とやりとりするのとはまた違う感じがした。特に時間の意識については、直前に連絡が来たりするときもあったので対応できないときもあった。今回の実習では、自分の授業の事情もきちんと実習先に伝える必要があったため、実習時間の調整については徹底したが、時差の関係や授業時間の関係もあり連絡が滞ることもあった。また高知大生 4 人が参加する実習に関しては、時間のとりまとめを私がやっていたためチームのマネジメント力の面ついても経験を積むことができた。今回の実習では日本語教育はもちろん異文化間コミュニケーションの経験を積むこともできたので今後のキャリアにつなげたいと思う。

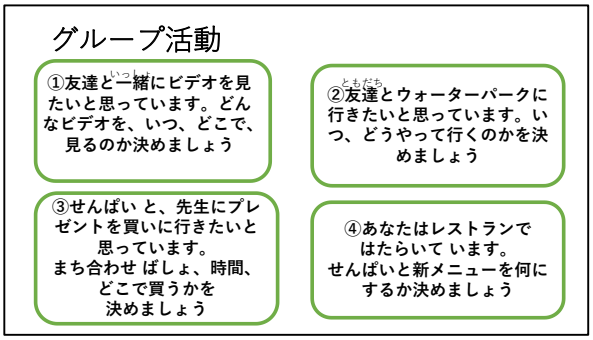
4.　実習の目標達成度

今回の実習の達成度については全体を通しては 70% である。というのもこちらの授業の関係で時間の調整ができず、中止になった実習があるのも事実である。そのため、時間調整をすることができるだけの余裕を持てなかったという面があるためマイナス 30% とした。しかし、中止になる場合はこちらから課題の採点を申し出るというので補填できたためその点はよかったと思う。

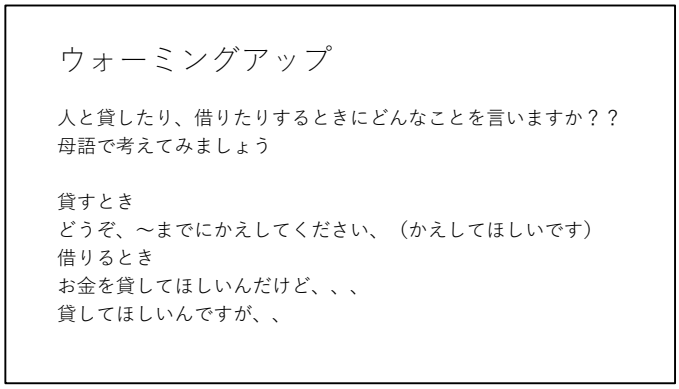
← 会話会での様子



←会話の授業の授業で使用したスライド



←聴解授業の模擬授業で使用したスライド



国際社会実習　報告書

人文社会科学部 国際社会コース２年
B221G254N　百々　遥

1.　実習内容

私が今回実践した活動は大きく分けて以下の６つである。事前準備ではブラビジャヤ大学日本語コースの内容調べ、授業内容では会話授業、作文の授業、聴解の授業、会話会での日本の文化紹介、模擬授業を担当した。授業は基本、同じ授業を２回担当し、１回目はその授業の担当教師が行う授業を見学、２回目は１時間半の授業をこちらが担当させていただく形だった。会話会では日本人学生１人につき15分ほどの時間があり、それぞれ日本の文化を紹介した。私は、縄文時代から現代までの日本の建築物の変化と、今の日本の空き家問題を発表した。最後の模擬授業では、ブラビジャヤ大学の先生方に授業を行うというものであった。１人の持ち時間が少なかったため、向こうから提示された教科書をもとに導入部分を模擬授業した。

2.　取り組んでみて難しかったこと・学んだこと

会話会の授業は、教科書をもとに文法を学びながらいろいろな短い会話を見ていく、言ってみるという流れだった。担当の先生は自然な会話を交えながら教科書を進めており、日本のこととインドネシアのことをうまくエピソードに入れながら進めていた。私は１時間以上の授業を担当することが初めてであったため、担当の先生の授業を参考に、授業を行った。取り組んでみて、自然に会話をしているように見えても、事前にしっかりと話す内容や誰を当てるかを考えておかないとスムーズに授業を行うことは難しいことが分かった。また、オンラインでの授業だったのだが、あちらは教室に30人ほど集まっていて１つのパソコンで授業を行ったので声が聞こえなかったり、グループワークのチーム分けの指示が上手く通らなかったり等苦労した点もあった。これからオンライン授業を行う上で、１人１人パソコンを用意してもらう、又はマイクの有無の確認、パワーポイントによる指示が必要だと学びになった。

作文の授業は、１回目の見学で担当の先生が教科書のテーマに沿った簡単な問題やリスニングを行い、学生は次回の授業までにそのテーマに関する400文字程度の作文を提出し、２回目の授業で私が１人１人の作文にコメントを言う形であった。事前に作文の添削を行うことができたことで、授業は進めやすかった。添削をしてみて漢字・単語の間違いは添削しやすいのだが､不自然な文を自然な文に直すことは難しいことが分かった。以下に､例を示している。テーマは、インドネシアの環境問題である。

（学生の作成文）人々はよくゴミを道端に捨てる。それは水質汚染と廃棄物汚染の原因でした。

（添削した分）人々はよくゴミを道端に捨てる。この行動は、水質汚染と廃棄物汚染の原因となっている。

例のように、時制の混乱や不自然な指示代名詞の使用が見られる文を、学生のレベルに合わせてやさしい日本語で直すことが難しく、添削に時間がかかった。添削をしていても、実際に

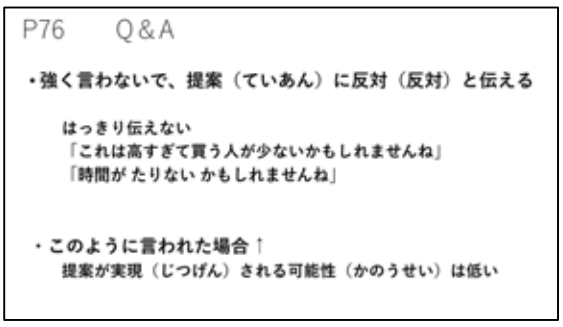
授業で学生の伝えたかったことが少し違ったとき、即興で正しい文を提示することもあったため、あらかじめやさしい日本語を使った表現や言い回しを頭に入れておく必要があると学んだ。

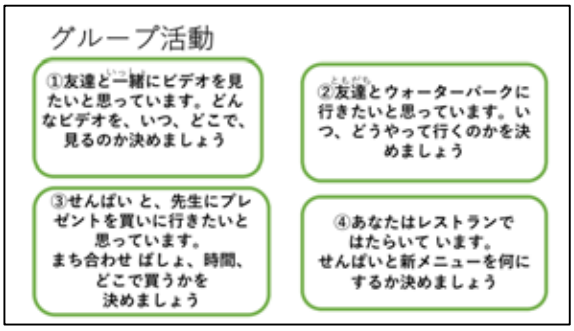
聴解の授業は、担当の先生の都合から会話をする時間に変更となった。1人ずつと話をすることができてとても楽しかったが、ブラウィジャヤの学生が日本のことをたくさん知ってくれていて質問をしてくれるからこそ、この会話会は盛り上がることができたなと思っている。もっと、私もインドネシアのことを調べておいて質問を用意しておく必要があったなと反省した。会話会では、パワーポイントはなるべく文字を使わず写真を多めに作成した。ブラビジャヤの学生が日本のニュースに関して詳しいことに驚いた。模擬授業では、分からない単語を質問された時に端的に分かりやすく答えられるように教案を考えた。模擬授業は最後に行われたので、それまでの授業で学んだことを生かして授業することができたと思う。導入にパワーポイントを使っている学生がいてとても分かりやすかったため次回からパワーポイントを使用しようと思う。

3. 全体を通しての活動

大学の授業1コマを任されることは初めての体験であったし、学生が海外の大学生であったため貴重な良い経験ができた。今回の活動を通して教師として教えるということに自信が持てた上に、海外に行って日本語に興味を持っている学生に教えるということに興味を持ったため、国際交流基金日本語パートナーズの短期派遣に応募し、春休みにインドネシアで1週間活動をしてきた。現地でも本当に貴重な出会いや体験をさせていただき、有意義な時間を過ごせた。ブラビジャヤ大学との交流から始まりインドネシアでの交流を広げることができ、今回参加をして本当に良かったと思っている。

授業で扱ったパワーポイント ↓





国際社会実習を終えて

人文社会科学部 国際社会コース 2 年
B221G271S　三木　花梨

はじめに

私たちは2023年11月から2024年1月の期間、オンラインによってインドネシアのブラビジャヤ大学で日本語教育に関わる国際社会実習を行った。主な実習内容としては、授業見学や実際に自分で行う授業運営、日本文化や高知大学の紹介、またそれらの授業・発表準備などである。ここから実際の実習内容や各授業で学んだこと、全体を通して考えたことなどを報告していく。

1.　実習内容の報告・各授業での学び

1)　会話授業

この授業では「会話」を中心にした授業であり、教材を使用しながら場面に合わせた会話表現を学習していた。一週目は日本人の先生が行う授業を見学した。実際の教育現場を見ることは初めてであり、授業を進め方や学生の反応など学ぶことが多くあった。私が見学をして感じたのは、学生との会話を大切にしているということであり、学生一人一人と自然な会話をしながら授業をすることで全員が授業内容に集中できているように思った。二週目は授業を担当することになり、今まで学生の前で授業をしたことがなかったため授業準備はかなり悩んだ。そこで見学させてもらった現地の先生のように自然な会話や学生に対する問いを多めに準備するようにした。またそれに加えて、グループワークなどの学生が主体となる授業が楽しく意欲的に学習できるのではないかと考えていたため、グループワーク・ペアワークの時間も充分にとれるように授業計画をした。

学んだこととしては、会話表現を説明するための引き出しを多く持っていることが大切だということである。一つ一つに対する説明の準備はしていたが、その説明が伝わらなかった時の補足説明や例文など、突然では学生の前での緊張もありなかなか思いつくことができなかった。そのためまだ授業運営に慣れていない状態では、例文のストックなども準備しておくべきだと感じた。グループワークなどは授業の雰囲気が明るくなり、一方的な授業ではないため意欲的に取り組んでくれたように思う。しかし、オンライン授業でのグループワークは各グループの様子を見ることやアドバイスをすることが難しいため、グループワーク以外の方法もこれから考えていきたいと思った。

2)　読解－作文授業

この授業では、日本についての長文読解やその内容に対する自分の意見を作文で書くということを行っていた。私が見学させてもらった回は、日本のごみ問題についての長文読解をしており、授業はインドネシア語中心で長文の意味の説明などが行われていた。授業の中で私が実際の日本の状況や日本人としてどう考えているのかを説明する機会もあった。二週目には課題となっていたごみ問題に対する作文を私が添削しフィードバックを行った。現地の先生なしで

の自分だけで担当する授業であったため、時間配分や進め方がかなり難しかったと感じる。まず一人ずつにフィードバックをして文章を修正してもらった後に、その修正した文章を発表するという授業構成で進めていった。一人ずつと話しながら進めていくことで本人の考えや質問も聞くことができたので良かったと感じている。

学んだこととしては、作文の添削をする中で助詞の指導がかなり難しいと感じた。意味は通っているが自然ではない文章が何度もみられ、どの程度指摘するべきなのか、どのように指摘するのかということを悩んだ。ネイティブスピーカーだからこそ修正できる部分をより分かりやすく指導できる技術が必要だと思った。

3) 会話会

会話会は学校時間外である土曜日にブラビジャヤ大学の１年生との交流会として実施された。まだ１年生である皆さんもすでに日本語のレベルがとても高く、自分の興味・関心があることを積極的に話してくれていた。特に日本のアニメや音楽、アイドルが好きだという学生も多く、私たちとそれらについて多く会話をした。私たち高知大学生側は高知大学や高知県についての紹介をし、それに対する質疑応答を行った。大学の環境や日本の街並みについてなど様々な質問があり、かなり楽しく盛り上がった活動であった。

学んだこととしては、自分の興味があることについて会話をすることは積極的に参加ができるようになり、自然なアウトプットを促すことになるためとても効果的だということである。発表という形式でもアウトプットは可能であるが、このような自由な雰囲気での会話を楽しみながら学習言語に触れるというのはとても良い方法であると思った。

4) ゼミ

この授業ではブラビジャヤ大学のゼミナールで日本の文化についての紹介を行った。私は日本の食文化についての発表を準備し、縁起がいい食べ物とその由来・日本での食事中の NG 行動について説明した。発表後は、学生だけでなく先生方も興味をもって質問をたくさんしてくれていた。特に食事のマナーは国によって大きく異なっており、「文化の違い」を感じた。例えば日本では、主にお箸を使いながら食べるため、手で食べることは行儀が悪いとされていることに対しインドネシアでは手で食べることも一般的だということでお互いに驚きがあった。またインドネシアでは左手と右手にそれぞれ意味があり、それを意識して食事を食べる手が決まっていることに対して、日本では利き手を使うためどちらでもいいという違いも興味深いと感じた。

発表をして感じたのは、食事マナーについてはあまり海外には伝わっていないため、将来日本に来た時のためにマナーの学習もしておくことが良いのではないかということである。多くの学生は日本語だけでなく日本や日本文化についても知りたいと思っているため、その中の一つとして食事マナーも学習しておくと大変役立つと思った。またこのような文化を紹介す

使用した発表資料↑

ることで、お互いに気づきがあるため、文化交流は大切だと感じた。

5）　模擬授業

ここではブラビジャヤ大学の２年生 (日本語習得レベル初中級) の学生に対し、教科書第一課『貸してもらう』の授業を行うという想定で導入部分 10 分の模擬授業を行った。私はイラストを用いて視覚的に理解できるような補助教材づくりを意識し、導入部分で「貸してもらう」という意味についての説明を行った。今回の実習での授業経験も踏まえて学生との対話が多くなるように授業計画を組み、質問や確認などを大切にしながら授業を進めた。

授業後にブラビジャヤ大学の先生から、イラストがあると説明が理解しやすいということと、学習者の解答に対する肯定的な返事が良かったとフィードバックをいただいた。そのため視覚的に理解できるということの重要さや、学習者の意欲を維持するための自然な声掛けなどの大切さなどを学ぶことができた。

使用した補助教材→

2.　全体を通して

今回のこの実習を通して授業を担当できたことはすごく大きな経験だったと感じている。大学生活の中では実際に学習者を前にした授業を担当する機会はなかなかないため、「教師」の立場を実感できるこの実習は私にとってすごく良い機会となった。授業計画の難しさや授業内での柔軟な対応、授業を行う緊張感など実際に授業を担当しないと経験できないことがたくさんあり、多くの反省点や学びを見つけることができた。この実習で学んだ授業経験をこれからの実習や模擬授業に生かしていき、よりよい授業が作っていけるようにしていきたい。また学生と交流をする中でまだまだ日本のことも高知県のことも知識が足りないと感じることがあった。そのため改善点として自分の住む国や地域についてもっと知り、学生の質問にもっと深くこたえられるようにしていきたいと思った。それに加え、相手の国のことも事前学習で調べた以上にもっと知っておくと自然な会話につながり、授業の例文にも活かせることがあったなと感じた。このように自国・相手国についてもっと知ることがとても大切だなと実感できた。そして今回はオンラインでの実習であったため難しさも少しあった。学生の表情がなかなか見えず、理解度などが確認することが難しかったり、通信状態が悪くなりスムーズにいかないこともあった。そのため Forms などで授業後の小テストやアンケートをして理解度をはかるなど工夫が必要だと学ぶことができた。今回の経験を参考にこれからオンライン授業がよりスムーズに進められるような授業内活動やツールの使用なども考えていきたい。

Report on 2023/24 Guided International Field Study Course

Field Study of English Language Use in India
World Englishes/ELF/Language Use in Context (Indian English)

国際社会実習 （海外調査実習 I）

Darren Lingley and Sean Burgoine
International Studies Course

Introduction

We are pleased to present this report on the first guided international field study course since the 2018/2019 academic year before the start of Covid pandemic. A special guided course entitled, 'Field Study of English Language Use in India' was convened from September 8-18, 2023, with two teachers and four student participants visiting Kerala, India. The priority objectives for courses like this are focused on creating opportunities for highly motivated undergraduate students to prepare and carry out field study abroad in a specific subject area, potentially leading to an undergraduate thesis related to data collected during the field study. Global learning experiences like this help to develop student research and English language competencies, promote language awareness, enhance learning outside common classroom environments, and develop intercultural communication skills through specialized meaning-focused interaction. For this field study course conducted in India, it was expected that participating students have a demonstrated command of communicative English ability with enough proficiency to carry out content-specific field study in an English-speaking country. International field study courses are designed to train undergraduate students in the value of practical but informed research projects. Participating students develop critical global perspectives through experiential study in international contexts under the supervision of mentor teachers.

International Field Study Course: Selection Process, Preparation, and Evaluation

Building on our previous 'Global Mobility Exchange Program', doing research in India is a valuable opportunity to pursue unique, high-level international course study. Convening guided international fieldwork opportunities for our International Studies Course students prepares them for a deeper understanding of educational, linguistic, and cultural issues in global contexts through authentic experiential learning. Participating students can learn firsthand about context-specific English language use, language education in other L2 contexts, and cultural issues in other parts of the world. With the key concepts of 'experiential study', 'global experiences' and 'research/education praxis' as the foundational principles of our international field study courses, this course was coordinated through the Study Abroad

Committee of the International Studies Course in the Faculty of Humanities and Social Sciences and faculty members (Darren Lingley and Sean Burgoine) with specialization in the target areas of study. Convening highly focused course opportunities for our students promotes a critical and methodical approach to education in a global world and helps to develop international insights about 'language in context'. Such field study courses foster the research/practice nexus (practical but informed by research) of language and culture.

The India field study course involved intensive ten-day research and data collection with interview participants and collaborators in Trivandrum, Kerala in southern India. This international field work course was announced in May 2023 and targeted students with interest in conducting guided field study about Indian English use, World Englishes, English as a lingua franca (ELF), and phonological descriptions of Indian English. Students who wished to register for this course were asked to submit a detailed research proposal in English to the Study Abroad Committee in June 2023. Submitting a proposal involved a demonstrated understanding about the intended research topic, a detailed research plan including ideas for data collection, and a statement about the expected outcomes from the field study – all drafted in consultation with the Seminar instructor. Based on the strength and relevance of their proposals, four students were selected from among five applications to visit Kerala, India from September 8-18, 2023, to do field study on their selected theme.

The specific research aim of this international guided field study course was to help students learn about basic interviewing techniques, which had to be accomplished in the students' foreign language - English. Prior to departure, the four students learned about basic data collection methods and planned their interviews based on established guidelines. In addition, they were also required to do preparatory reading in their respective areas of focus. The host collaborator, Dr. Shaji Erath from the University of Kerala, arranged access to local professional networks (e.g., schools, informants, interviewees), and much-needed field support to help successfully complete the field study proposals. Based on 'Best Practices' for conducting international field study, a combined cumulative assessment rubric based on the initial student proposal, quality/impact of field work and data collection, evaluative comments from cooperating University of Kerala staff, and final course report was developed to evaluate student work.

Field Study Interviews

Our field study began with a home visit on the first day arranged by Dr. Shaji Erath where we enjoyed an authentic Indian feast and then began to practice interviewing skills with a group of six engineering students who had been invited from Kerala Institute of Technology. We spent the entire day getting accustomed to being in India, learning about food, culture and family life, and interview practice. In this friendly and relaxed environment, our students could interact freely with Indian peers of roughly the same age. The Japanese students worked in pairs to practice their interviewing skills and to calibrate their understanding

of the prosody, rhythms, and unique usage features of 'Indian English'. This provided an excellent start point for our field study and the Japanese students were much more comfortable about conducting interviews after this collaborative practice session. Each of the six engineering students had been educated in English-medium schools and had strong command of English even with their pronounced Indian accents. They were very welcoming and understanding with our novice group of interviewers. We planned this practice session because India can be an extremely challenging environment for people who have never been there before. Being able to interview people for the first time under such conditions eased the Japanese student-interviewers into the process.

Indeed, we owe a great debt to Dr. Shaji Erath. Not only did he arrange a welcome party and a home visit to get our students accustomed to Indian life and practice interviewing techniques, but he also invited us to the University of Kerala to conduct interviews with an entire cohort of graduate students in the Faculty of Science on the second day. Some 25 graduate students in geology agreed to be interviewed throughout Day 2. These students provided us with a sample of male/female interviewees and nice mix of students who had been educated in English-medium and Malayalam-medium schools meaning different levels of proficiency. Shaji took care of all planning and transportation to and from the University of Kerala, a traditional Indian lunch of dosa and biriyani, and also arranged interviews with faculty and staff in the geology department. It was a tiring day in which we mixed team interviews and solo interviews and collected many hours of language data. Several of the Indian graduate students reported that they had never used English with a non-Indian before, so it was valuable for them as well to experience using English as an international language. And just as had been the case during our previous international field study course in Melbourne, Australia, the academic staff in the geology department expressed wonder that we were doing this kind of research as part of our undergraduate curriculum. Those not familiar with our project, assumed that we were doing graduate-level research based on what we were examining during our stay in Kerala. This indicates that our guided field study is atypical and beyond the level of standard undergraduate study. Shaji also agreed to be the official contact person for us for visa purposes. This represents host support that is far beyond what can normally be expected. He took care of us at every step during our stay in Kerala.

We are also deeply indebted to Prof. M. Santosh, a former colleague here at Kochi University in the Faculty of Science and current KU Professor Emeritus. He arranged all other aspects of our visit to Kerala, including social visits where we could interview his family, friends, and acquaintances. Santosh also arranged for us to visit a printing press and a Catholic missionary so that we could interview a cross-section of Indian people - younger/older, male/female, private sector/public sector and people with different proficiency and exposure to English use. We are most grateful to Shaji and Santosh for all arrangements and, clearly, this field study course would not have been possible without their support in every

aspect of our stay.

The student reports in this volume highlight the powerful learning experiences gained from their field study along with the real challenges faced with respect to doing field study in an unfamiliar culture/context. Feedback from Shaji and Santosh, and all the participants they arranged for us, was filled with praise at the adventurous spirit and serious demeanor of our team of four students. Our students interacted well with interview participants even as they tired throughout the week and began to experience culture shock and serious illness.

Summary Comments

Throughout this ten-day field study, we faced many expected and unexpected challenges. Among the biggest, was the ongoing need to re-adjust our research aims on the go. This was due to language limitations, the difficulties of interviewing people who are working on different schedules, illness causing scheduling changes, and even cancelling some of our late-week programs and the Singapore portion of our data collection due to a viral infection that spread amongst all four students and one of the guiding teachers. The entire second half of our program in Trivandrum had to be significantly downsized as the students fell one by one to a contagious viral infection that swept through our team and kept the students bedridden in their hotel rooms for most of the latter half of the field study. High fevers, sore throats and loss of appetite affected all students in turn. Original research aims had to be reconceptualized under these difficult circumstances.

As well, the interview process was often limited when interviewees responded with limited answers or took over the interview with extended responses. These latter cases were good for examining phonological aspects of Indian English but not for gaining a deeper understanding of our target aims. Our Course students sometimes did not know where to break in and often thought the interview process was challenging due to their own limited English skills. This was sometimes the case, but not always. Students working in their second language might tend to blame themselves for perceived shortcomings in what they are able to extract from the interview. Admittedly, it was also hard for the student-interviewers to respond with meaningful follow-up questions not only because they were working in their second language, but also because their depth of understanding of the linguistic milieu in Kerala and the rest of India was somewhat limited. It is extremely difficult to rapidly be able to digest all of the cultural and linguistic references that come up during interviewee responses, and then follow up in kind. As teachers, we tried to distance ourselves as much as possible by choosing to not take part in most interviews. Some support is required but ultimately students need the individual practice, for better or worse, and as teachers we forced ourselves to step back and let the students find out what they could by themselves. Despite these limitations, each student collected several hours' worth of data and interviewed 30-40 Indian people from many different walks of life. More than sufficient data was collected to ensure that each student could write separate senior theses on different aspects of Indian

English, language use and language policy.

The students undertook this field study with enthusiasm and learned a lot from their field work. More preparation for interviews and background reading about resource materials on Indian English would have improved the quality of interviews but this group of students had very busy schedules with KU exams/reports and summer travel prior to our departure. Of course, the limitations due to serious illness were even more pressing and meant that we did get nearly as much data as we had hoped for. However, what we did get was still significant. Our hope as guiding teachers is that the process of conducting interviews in their L2 was a strong learning experience, and that a couple of the students will use the data they collected for their senior thesis and perhaps even for future graduate-level research. We also hope that the strong memory of the illness they endured and the food and culture shock they felt during their stay in a very challenging environment will be minimized over time and replaced with memories of the many fantastic things they experienced in Kerala. As with any limited-duration field study experience, if this project was successful, it will have raised more questions than it answered for the participants, leading to more future study.

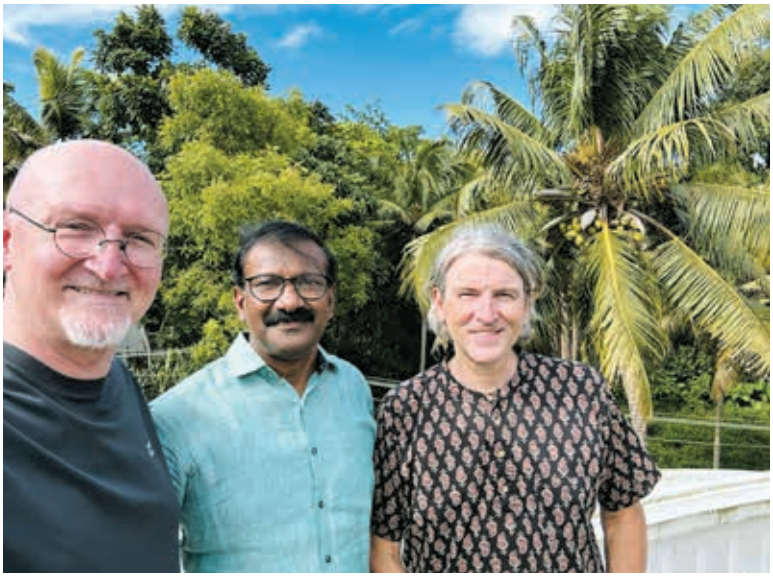
Coordinating the field study for our four participating students, Ms. Kaho Numoto, Ms. Mami Fujiwara, Ms. Miu Kubokawa, and Ms. Lee Peihsuan Maggie was a rewarding experience for us as teachers. Accompanying such keen students with a specific research aim who were deeply interested in exploring, experiencing, and understanding their target content objectives is among the most stimulating things a teacher can experience in working with learners. They were extremely busy during their stay in Kerala. Professor Burgoine and I were constantly impressed with how each student approached their field study tasks under stressful conditions. We are convinced that in spite of the relatively short time period of this field study and the serious illness that student experienced, it was beneficial for them in practical, educational, and research terms. The students showed a strong willingness to interact with Indian people and learn about a previously unknown culture, and to carry out to the best of their abilities a level of field study that is not normally undertaken by most undergraduate students. They gained real insights about what it takes to gather and record data and do research, and they learned a lot about the real challenges of designing and carrying out a research plan, especially when we consider it was done in their second language and in an extremely challenging foreign setting. As teachers, we were impressed with their effort and enthusiasm.

Appendix 1: Field Study Brochure PDF (Indian English)

Appendix 2: Itinerary

Appendix 3: India field study (student costs)

photos



高知大学
Kochi University

説明会 (1)：5月19日　（金）12:15, Rm 310

国際社会実習（海外調査実習 I）

World Englishes: Indian English

Field Study of English Language Use in India

- September 9-18, 2023
- Kerala, India (Trivandrum)
- World Englishes (Indian English)
- Experiential/Guided field study
- Language in context/ELF
- Data collection (Indian English usage)
- Interviews
- Capacity: 4-6 students

Instructors:
Sean Burgoine/Darren Lingley

Are you interested in doing guided field research about World Englishes (Indian English) and English as a lingua franca (ELF) in an Outer Circle ESL context? Would you like to learn more about how English is used in India?

Application Procedure

Prepare a research proposal and submit it to the Study Abroad Committee (International Studies Course). The proposal should include the following:

- Research background
  (show that you have read about your area of research interest, especially as it relates to ELF, World Englishes, Indian English, or English use in context)
- Detailed research plan/design
  (in consultation with seminar teacher)
- Data collection plans for Field Study in India
- Expected outcomes
  (eg. undergraduate thesis data, how this research will benefit you, plans to report or present your findings)

The successful candidate(s) for this course:

- will have demonstrated communicative English ability
- will be a highly motivated, research-oriented student (3rd/4th year) with a strong interest in exploring/researching Indian English use
- will develop their field study research plan with a supervisor teacher prior to departure for India

Application Deadline: June 9, 2023

Successful applicant(s) will be notified by mid June

Submit to: Prof. Kyoko Tsuchiya, Study Abroad Committee (tsuchiya@kochi-u.ac.jp)

For more detailed information: Sean Burgoine (burgoine@kochi-u.ac.jp)

Appendix 2: Itinerary

9/7: Depart Kochi – NRT (Jetstar) 15:05, arrive Narita (16:45) *one night hotel at Narita
9/8: Depart Narita (11:10), arrive Singapore (17:20), depart Singapore (20:20)
9/8: Arrive Trivandrum (22:00)
9/9 - 9/10: Welcome/planning/preparation session with Dr. E. Shaji (University of Kerala)
9/11 - 9/16: Field study and data collection (Trivandrum, India)
Saturday: Planning/preparation sessions; interview protocols
Sunday: Shaji home visit/interview practice session (Kerala Institute of technology students)
Monday (9/11): University of Kerala grad school interviews; Shaji Residency Hotel dinner
Tuesday (9/12): St. Joseph's Press staff interviews; Catholic missionary visit; Hotel dinner
Wednesday (9/13): Lexshmi/Devika interviews; Suresh company members dinner/interviews
Thursday (9/14): Santosh home visit; Windsor Hotel dinner *cancelled due to illness
Friday (9/15): Santosh family interviews *cancelled due to illness
Saturday (9/16): Sightseeing (*cancelled due to illness) Evening Trivandrum departure (23:00)
9/17: Arrive Singapore (06:15)
9/17: Additional field study and data collection (Singapore) *cancelled due to illness
9/17: Depart Singapore (23:55; overnight flight from Singapore to Tokyo)
9/18: Arrive Narita (08:00), depart Narita (Jetstar) 12:45, arrive Kochi 14:25

Appendix 3: India field study (student costs)

International airfare	101,420	(Narita – Trivandrum - Narita, via Singapore)
domestic travel	15,000	(Kochi – Narita – Kochi)
hotel	25,000	(Two students/room)
travel insurance	15,000	(Kochi University Center insurance)
meals/pocket money	15,000	
Total	**170,000 (approximate)**	

English and Malayalam in India:
The Relationship Between English and Native Language in an ESL Country

人文社会科学部 国際社会コース３回生
Miu Kubokawa（久保川美羽）

Introduction

This field research was the first time for me to visit India. I spent time in Trivandrum, Kerala from September 9th to 16th. My research interest was mainly about how English is spoken in India. India has the largest number of non-native English speakers in the world. In India, people use English as a second language (ESL). Therefore, it can be said to be the place where English as a lingua franca exists the most. English has some status as a semi-official language and English is often used in education and official procedures. In addition, Indian English is famous for its distinctive accent. This is quite interesting for me, therefore, I wanted to know why English is used so much in India and what makes Indian English unique. To investigate how English is spoken in India, I visited Prof. Shaji's house, Kerala university and St. Joseph's press and conducted interviews with students and people working at St. Joseph's press. I learned about the environments in which they typically use English, the reasons for this, and their experiences with the education system. Additionally, I was able to record the Indian English of over 20 individuals of various ages. Initially, it was challenging to understand their English, but gradually I became accustomed to the accents and was able to analyze their characteristics. In this report, I will describe the details of these interviews, what I learned about the Indian English education system, and the characteristics of Indian English.

Interview with students at College of Engineering Trivandrum

On September 9th, we visited Prof. Shaji who is a geologist at Kerala University. He arranged for students from the Kerala College of Engineering Trivandrum to be interviewed.

First of all, Anhajul is a native Malayalam speaker. There are many different languages spoken in India, but Malayalam is the language that is spoken by most people in Kerala. Anhajul has been learning English since kindergarten and attended an English medium school, so he is accustomed to speaking in English. While he is familiar with the Indian and British English accents, other accents can be challenging for him to understand. He feels that the Malayalam accent is affecting his English. He would like to get rid of it so that people unfamiliar with Indian English can understand him but finds it difficult. In India, there is an image that the upper class has high English proficiency, which can lead to advantages in job opportunities and salaries. While he believes that Indians have strong English literacy skills globally, he acknowledges the challenge of speaking with a strong accent, making

communication and understanding English challenging. He sees mutual error correction among English learners as beneficial for improving English proficiency.

Keerthana, one of Anhajul's friends, was born in India but raised in Dubai, where she predominantly spoke English. Despite Malayalam being her mother tongue, she finds English more comfortable. She speaks Malayalam with friends in Kerala but communicates in English with her parents, siblings, and local friends in Dubai. She feels that the difference between Malayalam and English lies in the inability of English to express some concepts in a single word, unlike Malayalam. She believes that Malayalam words have influenced her English vocabulary. Regarding accents, she isn't too concerned as some of her friends in Dubai have stronger accents.

Darryl, another friend of Anhajul's, aspires to work internationally and believes that learning English and improving his accent are essential for achieving this goal. While he is open to mutual correction among English learners regarding grammar and vocabulary, he thinks accents should be left as they are and not imposed upon others.

Interview at Kerala University

On September 11th, we visited Kerala university and interviewed geology students. We visited a class and enlisted the cooperation of 30 students for the interviews. We divided into two groups of two people each and conducted interviews with 15 students in each group. They were all post-graduate geology students and had Malayalam as their mother tongue. The interviewees can choose from Hindi or Tamil, besides English, as their second language. Some of them attended English medium schools, while others did not. They take university classes in English, and teachers encourage them to speak English. Even if their native language is Malayalam, they are expected to ask questions and respond in English during class. However, when they are unable to ask questions in English or when the topic becomes complex, they are allowed to speak in Malayalam. Many of them are accustomed to listening, reading, and writing in English and excel in these areas. Therefore, while it may not be common in Japan, some students take notes in English. Additionally, they take pride in Malayalam being a more complex language compared to English. They find writing in the Malayalam script to be particularly challenging even for native speakers. Furthermore, they acknowledge that there are different dialects of Malayalam, leading to variations in vocabulary, which might be another reason for taking notes in English.

They have limited opportunities to speak English, many students did not have confidence in their spoken English skills. While many of them feel that Malayalam influences their English vocabulary, fewer believe it affects pronunciation or grammar. They recognize that English spoken in other states, such as by Hindi speakers, may sound different from their own pronunciation, but can still be understood. Regarding error correction among English learners, some see it as beneficial for mutual growth, while others believe creating an

environment where learners feel comfortable speaking English without hesitation is more important. Sometimes it is necessary not to point out a speaker' s mistakes.

Interview at St. Joseph's Press

On September 12th, we went to St. Joseph's Press. St. Joseph's Press is a printing company located in Trivandrum, Kerala, India. There is also a Catholic church nearby, which we visited. The garden of the monastery next to the church was very beautiful. After that, we conducted interviews to staff who worked there. Since they did not speak much English, we were not able to interview them satisfactorily. They had not attended English medium schools and had received education only in Malayalam. Honestly, there were even those who could not answer simple questions, so the interviews did not go smoothly. However, there was a man named Shijo who had been studying English on his own. He did shadowing of famous movie lines like those from "Titanic" and posted lip-sync videos matching audio

on social media. Thanks to that, he could communicate better than others, but he was extremely nervous. At least, we found that he prefers Malayalam than English for speaking, and Malayalam was very difficult for writing, so sometimes he wrote in English.

Summary Comments

The most challenging aspect of the field research in India was understanding the interviewees' English. They had much stronger Indian accents than I had expected, making it nearly impossible to fully comprehend their English during the interviews. In fact, I could only understand about 80% of what they were saying during the actual interviews. However, listening to Indian English became rewarding. While there were many words I could not understand in the initial interviews, by the end, I could understand most of their English. I felt my listening skills improved as I conducted more interviews. However, communicating with those who hardly spoke English was difficult, making those interviews quite challenging. I tried to communicate using simple English and gestures. While I could ask basic questions, I struggled with more complex ones. Interviewing university students was easier as we had common topics, making communication smoother and the interviews enjoyable. Conducting interviews for phonological analysis of Indian English was enlightening, as I learned

interesting things from the interviews. In Kerala, where we visited, Malayalam is the most spoken language. However, with 29 states and over 450 languages in India, English is often used as a lingua franca when communicating with people from different states. In Kerala, people learn Tamil, Hindi, or English as a second language. In North India, where Hindi is spoken in many states, even people from different states converse in Hindi. I was surprised that for people in Kerala, English is considered their second language alongside their native tongue. Additionally, I was surprised to find that many interviewees took lecture notes in English, mainly because spelling Malayalam is very challenging. They understand Malayalam and mentally translate to English to take notes. While India is an ESL country where English is learned as a second language, it seemed similar to EFL Japan, as English is used less frequently outside of school.

From a phonological point of view, I noticed that their English has a distinctive pronunciation of /r/, placing a strong stress on it, slightly trilled and an overall muffled sound. In particular, the /r/ was very strong and sounded like the Japanese "ru" (る) phoneme. In addition, many of students' English words were spelled as they were written, known as phonetic spelling, and the way the words were read was very different from that of American English or British English. In addition, there was a tendency for Indian speakers to open their throats and speak through their noses, creating a flow that is unique to Indian English. Also, although this may be due to the influence of Malayalam, many people spoke fast and with strong accents, so it was really hard for me to understand them.

I interviewed people with a variety of language experience backgrounds during this international research exercise, and as I expected, those who had attended English medium schools had fairly high English-speaking ability. Among them, those who spoke English more frequently on a daily basis spoke English fluently. Furthermore, I found that the Indian accents were a little weaker among those who spoke English on a regular basis, even among those who spoke Malayalam as their mother tongue.

Finaly, when engaging in data collection in a foreign country, I felt that in addition to needing to have enough language skills to be able to interview people, non-verbal communication skills such as greetings, chatting, attitude, and smiling are also important to make the interview go smoothly. In particular, I thought that the difficult part of this project was arranging interviewees. Fortunately, I was able to interview many people this time thanks to the cooperation of various people. However, I thought it was impossible for me to arrange all the interviewees by myself.

India Research Reflection

人文社会科学部 国際社会コース３回生
Mami Fujiwara (藤原真美)

Research Background

India is now one of the world's largest English-speaking communities in a situation where the language is increasingly seen as a gateway to the world. The reason why English is so prevalent in India is because of India's history of British colonization. From the early days of colonization to the present day, English has played a very important role in the region. In India, one of the official languages of the country is Hindi. But 60% of people don't speak Hindi, they speak one of the approximately 600 languages spoken in India. That is why English is used in India as a lingua franca. English as a lingua franca is a language used by people who do not have a common language to communicate.

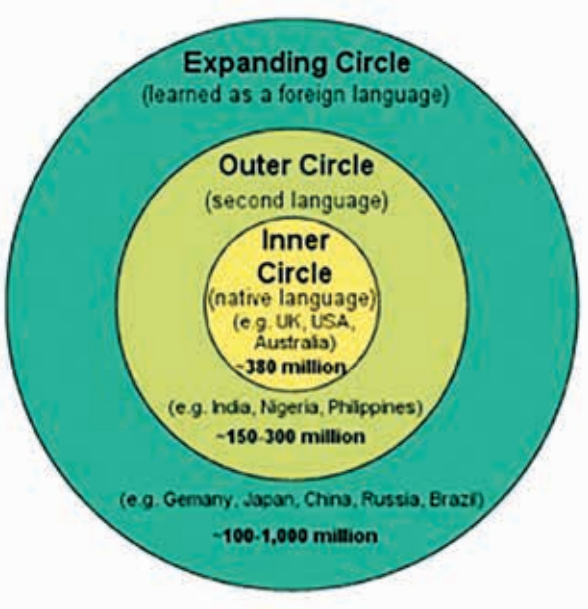


Figure 1. Three Concentric Circles of English Language Model (Kachru, 1985)

In the 1980's the Indian linguist, Braj Kachru, formed what is now known as 'Kachru's Circles', to help categorize World Englishes. In Kachru's three circles of English, English is divided into three types. The first is that English is spoken as a first language like in the USA or UK, it's called the Inner Circle. And the second is called the Outer Circle, which uses English as a second language. Many countries in the Outer Circle have a history of colonization by an English-speaking nation and therefore English remains in an official capacity. The third is the Expanding Circle, which uses English as a foreign language and is therefore only used in the classroom or some less common situations like for tourism. It is not used on a daily basis.

I have been to Canada to study for 8 months where English is used as a first language. As a Japanese student who has travelled and studied in Canada, I have had experience of both

Inner Circle and Expanding Circle countries. However, India is an Outer Circle country and English is used as a second language. I have never had any experience with an Outer Circle country, so I wanted to research about it.

Research Plan

In India, people speak English as one of the main languages for interstate and everyday communication. Therefore, we investigated what language is used in educational facilities such as universities or in the private sector. Data collection was done primarily through interviews of a wide range of people from different backgrounds. These included students or company employees who had been educated in only in English medium schools and those who had studied in the local language, Malayalam.

An example of the kind of questions that were asked to gather data are written below.

-Do you speak English when you speak to other Indians? (what situations)

-Do you use English to communicate with people from other countries?

-Are there miscommunications when speaking with people from other countries? (in what situation/ what kind of miss communication)

-When you speak in your native language, do you use sometimes use English words?

-Do you read or watch television in English? (using subtitles)

-When you speak English, do you feel comfortable, or do you get tired when you speak English all day or if you are in an English environment all day long?

-Is it important or necessary to be able to speak English well in India? (Is there any advantage for it?)

The University of Kerala

It was very enjoyable to talk to university students. They were extremely receptive to being interviewed and very friendly to us. But sometimes it was different for me to comprehend Indian-English, and I think they felt the same way too about our Japanese English.

Most of the students went to English medium schools, so they started to learn English at

around 6 years of age. Therefore, at first glance, they may have seemed very fluent in their English speaking, but some students didn't have confidence about their English-speaking skills. This might be because students often speak their native language when they talk to their classmates during class and outside of class. On the other hand, some students speak English very fluently, for example they don't use subtitles when they watch a TV series or movie from America. From this, I think even if people have the same education from the age of 6, there are differences in their English-speaking abilities. Also, I felt that everyone was able to speak much better than the average Japanese university student. And when I asked if they use English to communicate with people from other countries, only a very small number of people said they had such an experience. In Japan, for example, the number of tourists is rapidly increasing after the coronavirus restrictions were eased, and there are more opportunities to speak English, even in Kochi. Therefore, it was interesting that they did not have an opportunity to talk to people from other countries.

St. Joseph's Press (Printing Company)

It was difficult for me to conduct interviews with the interviewees who were working at the printing company. This is because most of people's English skills are limited because of they went to Malayalam medium schools. I asked questions to them just as I did in the university, but they appeared not to understand anything I said at all. I felt it was just like a Japanese people who can't speak English and made me realize that English is not as widely spoken by everyone as I had imagined.

Experience in India

We had a dinner several times with Professor Lingley's Indian friends, Professors Shaji and Suresh, and they very welcoming and served us lots of food. They also taught us Malayalam language and we had many great nights. For me, eating Malayalam food was interesting, In Japan we don't eat food using our hands except when eating sushi, so it was difficult for me. Moreover, they keep serving food when my plate was empty, so I could see how well they treated people. It was a unique experience for me, and I could see what a rich culture it was.

Considerations

I was very happy to speak with Indian people in English. Because we have different mother tongues, if I couldn't speak English, we wouldn't be able to understand each other. Therefore, I was happy to talk about not only Indian-English but also other things such as culture and their mother language in our common language.

Moreover, the interview was not difficult and was a great experience for me. This is because India is so different from Japan. For example, at the university, I found out that people from Trivandrum can choose between English medium schools or Malayalam medium schools. We have international schools in Japan, but it is hard to enter because they are so expensive. Therefore, we normally go to school where we study all subjects in Japanese except English classes. Also, in Japan, English has become compulsory education for elementary school students starting from the third grade in April 2020. However, in India, 1/4 of schools are English medium schools. Furthermore, 64% of schools in Kerala are English medium schools. From this, I could find out how English education is different between Outer Circle countries and Expanding Circle countries.

Something that I was interested in was that there is sometimes no specific word for a certain word. For example, they don't have a specific word for "window" in Malayalam. There is a word in Malayalam to explain it, but it is too long, so they use the English word. I guess it is because India was colonized by Britain. Secondly, Indian people have an incredible number of languages. In Japan, we communicate only in Japanese, even though we have many dialects, but we can understand each other. Indian people, however, sometimes can't communicate with people from other states. Some people can understand the different languages, but they can't speak that language. Therefore, at that point, English is an important language for them. But even when Indian people from different states speak to each other, it seems that they feel it is very difficult to understand because they have different mother tongues and accents.

And of course, being able to speak English in India will be the key to getting a good job. If you work in the local area, speaking English is not so important, but it is very important when you are working in places such as international airports or government offices.

Conclusion

In conclusion, through the interview, I learned that the way English is used in Outer Circle countries and Expanding Circle countries is different. Compared to Japanese university students, Indian students speak English quite well. Also, I thought there was a well-developed educational system in which students can choose English secondary schools. Moreover, after talking with people in India, I learned a lot about how English is important there. Even though India has many languages, English is like a common language that helps everyone talk to each other.

When I talked to university students in Kerala, I saw that some had very high English skills, but others weren't as confident. It showed me that learning English can be hard for some people even in India, depending on their school and how much they're exposed to English in movies and TV. I also talked to people working in a printing company, and many of them struggled with English. This made me realize how important it is to know English for certain jobs. India's mix of languages makes communication difficult sometimes, but English helps a lot, especially when people from different states talk to each other or when they're dealing with international affairs. Overall, my time in India showed me that knowing English is not just good for finding a job, but it also helps people understand each other's cultures better.

Looking back on my time in India, I learned how important it is to learn different languages and understand different cultures. Learning English, especially, can help us connect with people from all over the world. It's like a key to many opportunities. It's important for students to realize that being good at languages is useful in today's world where everything is connected. I think we should take every chance we get to improve our language skills. My experiences in India also showed me that everyone should have the chance to learn languages, no matter where they come from or what language they speak at home or school. By making sure everyone has access to language education, we can help everyone communicate better and be part of the global community.

In the end, my field study in India wasn't just about learning English as a lingua franca. It was also about understanding all the different languages and cultures that make India special. The time I spent going to India and learning through interviews was very valuable, and I hope to use this in my graduation thesis.

India Field Research Report

人文社会科学部 国際社会コース３回生
Kaho Numoto（沼本佳歩）

Introduction

I took Prof. Burgoine's English phonetics lecture, and I learned much about the intelligibility of English. This is what started my interest in the intelligibility of English. Because I felt that English "intelligibility" is the key for communicating with people all over the world. And I was sure that it is one of the most important things in communication when I learned about it. And then I started thinking about what communication is or what is language. And I found my answer to these questions. First, I believe that the biggest role of language is as a tool for communication. This is the case with English also. That's why for people communicating, speaking English with the same accent of a native English speaker is not important. The most important thing is that those communicating can understand, and listeners can understand what they want to express. Second, communicating with people and understanding their thoughts to get new knowledge, thoughts, ideas and beliefs is for most people an enjoyable activity. It means that listening to other thoughts, ideas and beliefs, and understanding these is more crucial than insisting on one's own opinion. In other words, I define communication in two perspectives, one is from the speaker's perspective, and the other is from the listener's perspective. Those speaking should express themselves in a way that can be understood by other people. Listeners should have a posture of listening and understanding what speakers want to express. I came to consider that "intelligibility" is the key for communication.

Research Background

There are two relative thoughts in pronunciation guidance of English education. One of them is the nativeness principle, and the other is the intelligibility principle (Levis, 2005). The nativeness principle entails that the primary goal is for L2 English learners to get English pronunciation similar to that of a native English speaker. It has been well researched that there are many English learners who want to attain the English pronunciation of native English speakers (Derwing, 2003). Having this motivation to learn English and aspiring to have English pronunciation like native English speakers is what we know as the nativeness principle.

The intelligibility principle is that learners of English as L2 should not necessarily aim for "native-like" pronunciation but intelligible pronunciation. Good pronunciation that is easily understood is intelligible pronunciation for all listeners, and pronunciation that is difficult to understand is unintelligible pronunciation (Jones, 1956). The target of pronunciation guidance

of English education is should not be pronunciation like native English speakers, but English learners should aim to get a proficiency of English pronunciation that allows them to communicate with others without any difficulties (Celce-Murcia, et. al, 2010). That means that intelligible pronunciation is the most important for communication.

I agree with the intelligibility principle. In addition to the reasons mentioned above, there are 1.5 billion people in the world who use English in their daily lives. The total world population is estimated at 7.3 billion. Surprisingly, only 1/4 (25%), or 380 million, of the world's 1.5 billion English speakers are native English speakers. The remaining 3/4 (75%), or 1.12 billion, are non-native speakers who learned English as a second or foreign language (Crystal, 2008). Also, according to Crystal, India has approximately 200 million L2 and 350,000 L1 English users, in other words, roughly the same as the number of L1 English speakers in the US.

I have experienced that many non-native speakers use English. Upon traveling to Malaysia, I noticed that Malaysians use English in their normal daily life. And I found that their English is influenced strongly by their mother tongue. Their English differs from native English. However, I thought that it is easier for them to use the English that they are accustomed to rather than strive for a native English model. The key to it is intelligibility. Although previous research measured the accent of a non-native speaker to judge their pronunciation proficiency, recent research focuses on intelligibility. For these reasons I researched how native languages influence a second language and how it influences intelligibility.

Activities in India

We spent 10 days in India, and I experienced not only a range of activities based around our interviews but also many cultural exchanges as well.

I conducted interviews twice. The first interview was with several people invited by Prof. Shaji to his home. They were all engineering students from a local university in Kerala. We paired up and interviewed the interviewees. We tried to make the situation very casual so that the interviewees could relax. We assumed that this would be the best way to gather data. Because we were also nervous about our first interview, I thought that it was more comfortable, not only for us, but also for the interviewee not to be overly conscious of being interviewed. In other words, it was more of a casual conversation rather than an interview. The interviewees were very willing to answer questions in English. I felt that they are very accustomed to using English.

The second interview was for students at Kerala University. We conducted interviews one on one this time. Some students answered my questions without any difficulties, others,

however, couldn't understand my questions. Sometimes we were forced use an internet translator to communicate with each other. This was an extremely interesting part of our data gathering as it highlighted how even though we are both communicating in English, sometimes there are intelligibility issues that result when learners come from different backgrounds.

Interview Questions

Below are the questions that I asked the interviewees.

- Did you study in your native language or in English?
- Do you speak English when you speak to other Indians?
- Do you often have miscommunications with other Indian people?
- When you are speaking in your native language, do you sometimes use English words?
- Do you read or watch television in English?
- When you speak English, do you feel comfortable, do you get tired when you speak English all day?
- How would you rate or describe your English education in India?
- Is it important or necessary to be able to speak English well in India?
- Is there any advantage for this?

I would like to make one comment about the cultural experience in India. The most surprising thing was that Indian people who I met drank room temperature water despite the fact that it was so hot. I found this unbelievable because I can't bear the Japanese summer without a cold beverage. I asked the students why they don't drink cold water and they answered that it isn't good for their health. It made me think that Indian people are very health conscious. 80% of Indian people are vegetarians and most people in India don't drink cold water for health reasons which brought me to this conclusion.

Investigation

Indian English, being used by people who speak English in India, has unique features based on regional and cultural differences. High Intelligibility means smooth communication between speakers and listeners. Factors such as proper language use, pronunciation, and grammar accuracy influence intelligibility. Therefore, improving intelligibility is crucial for enhancing communication fluency and mutual understanding. When considering the importance of intelligibility in Indian English, providing specific examples and backgrounds can offer a more detailed understanding. For instance, India has various regions, languages, and dialects each of these have their own accents and expressions. This diversity leads to different characteristics in Indian English across regions, affecting mutual understanding. For example, the English spoken in South India may have distinct accents and vocabulary

compared to North India, making mutual understanding challenging at times. Another example, individuals whose native language is Hindi may be influenced by Hindi grammar and pronunciation when speaking English, which can decrease mutual understanding. Therefore, improving intelligibility in Indian English involves understanding regional language features and cultural backgrounds, as well as developing appropriate communication skills. To enhance mutual understanding, it is essential to deepen understanding of different accents and expressions and be conscious of using correct grammar and pronunciation in communication. This approach can effectively utilize Indian English and promote mutual understanding.

Intelligibility in Indian English is crucial for clear communication between non-native English speakers of diverse backgrounds and dialects in India. By ensuring that language is easily understood, individuals can convey thoughts effectively, fostering collaboration and mutual respect. Improving intelligibility involves considering regional language variations, grammar, and pronunciation to enhance communication fluency and understanding. Embracing these aspects can promote inclusivity and positive relationships among speakers.

Conclusion

Intelligibility is a key component of effective communication, transcending linguistic differences and cultural nuances. By focusing on proper language use, pronunciation, and grammar accuracy, individuals can enhance mutual understanding and communication fluency. Recognizing the diverse regional language features and cultural backgrounds is crucial for improving intelligibility. Emphasizing the need to listen, understand, and adapt to different accents and expressions can lead to more successful interactions and promote mutual understanding among speakers from varied linguistic backgrounds. Ultimately, prioritizing intelligibility in English can facilitate smoother communication and foster meaningful connections across diverse communities in the world.

Acknowledgment

I would like thank Prof. Lingley, Prof. Burgoine, Prof. Shaji, Prof. Santosh and Ms. Ichikawa so much for giving us this research opportunity. It was a wonderful experience. I had many great experiences like interviewing in English, eating banana leaf curry with my right hand, riding rickshaws, and doing traditional Indian Yoga. In addition, all of the memories in India, including the illness that I experienced, have been meaningful and unforgettable. The biggest thing that I learnt through all these experiences is that any culture is beautiful even if it is difficult to relate to due to culture shock. So always be respectful when encountering different cultures. This trip reaffirmed that. Finally, everyone's support has made this research amazing. Thank you so much again. I hope to see everyone again in Japan or India!

References

Celce-Murcia, M., Brinton, D.M., Goodwin, J. M. & Griner, B. (2010). Teaching *pronunciation: A course book and reference guide* (2nd ed.). Cambridge University Press.

Crystal, D. (2008). Two thousand million? *English Today, 24*(1), 3-6. http://doi.org/10.1017/S0266078408000023

Derwing, T. M. (2003). What do ESL students say about their accents? Canadian *Modern Language Review,* 59(4), 547-567.

Jones, D. (1956). *The pronunciation of English.* Cambridge University Press

Levis, J. M. (2005). Changing contexts and shifting paradigms in pronunciation teaching. *TESOL Quarterly, 39, 369–377*. https://doi.org/10.2307/3588485

From Malayalam to English: Understanding Language Shift in Kerala, India

人文社会科学部 国際社会コース３回生
Lee Peihsuan Maggie（李　佩セン）

Introduction

This is a report of my international field study from September 8th to 18th in Trivandrum, India. The primary focus of my study was to explore the adaptability of English in a multilingual context within this diverse culture. Over the course of ten days in Trivandrum, I undertook home visits to gain deeper insights into the local lifestyle, where I had the opportunity to experience homemade dishes and learn about unique ways of enjoying them. During these home visits, I was also able to communicate in English and interview many people. Also, I interviewed undergraduate students from Kerala Engineering College, visited the University of Kerala to interview graduate students, and spent a day interviewing people employed at St. Joseph's Printing Press. This enabled me to conduct a thorough investigation by interviewing, three undergraduates, over twenty graduate students and five employees spanning different age groups. Despite English being the most popular second language in Trivandrum, my observations revealed varying levels of proficiency among the local people I interviewed.

This field study program in India was full of challenges. Despite doing a lot of research beforehand, language differences sometimes made mutual understanding difficult. However, I made efforts to communicate directly using nonverbal cues and body language and fostering direct communication rather than relying on translation applications. In this report, I would like to explain the process of the field study trip first, and then analyze the observations from the data collected in interviews. This report aims to provide detailed information on the progression of the field study trip, followed by an analysis of observations derived from the data collected during interviews.

English education in India

India as a diverse country contains 22 official languages, which are also called scheduled languages. These include Hindi, Malayalam, Kannada, Konkani, and many others. The state of Kerala which we visited on this field study trip, mainly consists of people who speak Malayalam as their mother tongue. However, unlike some countries, India does not have

a national language. Each state and union territory has its primary language of use. While Hindi occupies a significant position in this diverse linguistic landscape and the government tends to promote it as a link language, English has become the principal language of connecting people from various regions.

Malayalam is classified as a Dravidian language (see Appendix 1 infographic). This is an example of the linguistic diversity where people may speak different regional languages in a single country but often communicate with one another in English or Hindi. India has lots of languages because they want to keep their many unique language traditions alive. This helps them communicate better in their huge and diverse country.

During the research, my interview questions revolved around the language exchange between Malayalam and English in different situations. I asked the following questions to my interviewees:

- Background of language.
- When do you use English?
- How do you feel when you speak in English?
- What is the difference between your language and English?
- Which do you prefer using - Malayalam or English?
- Do you think your Malayalam language affects your English? How?

In the first group, I interviewed three undergraduate engineering students from the Kerala Engineering College. Surprisingly, they do not have English as a dedicated course at school, but their English is almost as fluent as a native speaker although accented in prosody. Their command of grammar and vocabulary was outstanding, but they displayed distinct pronunciation features of Indian English and unique English language usage in some expressions. This phenomenon confused me and encouraged me to inquire more about the factors contributing to their strong English skills. According to the interviewees, the education system in India is divided into English-medium schools and schools where the curriculum is delivered in the mother tongue of Malayalam. In Kerala, a state with a large middle-class population, many parents are aware of the educational demands nowadays. As a result, many send their children to English-medium schools from the early stages with the expectation that this will lead them to have a higher career status in the future. However, the use of English as a medium of instruction is based on a significant demand, especially from outside the country. The national-level data shows the better performance of students in private English-medium schools compared to those in vernacular medium schools. People's desire to learn English is often connected to their economic and social status. Those who have better finances may prefer English instruction, while those with fewer resources might not have the same opportunity to access English medium instruction. Therefore, the demand for English in education is not just about the language itself, but also about who has the chance to access it.

In fact, most of the interviewees said they were told by their parents that they would have a brighter future ahead if they learned in English. The reason is that for careers such as journalism or to be a teacher, any job related to English can be considered. In India, English is considered to be a language of the higher classes. If people require an academic job or an official job, English will most definitely be needed. In addition, I was shocked by one of the

undergraduate students who said: "Once you're out of the state, the only language you need is English. If you have to talk with the local people there, unless you know their native language, you have to communicate in English". Therefore, I could see that although people may live in India and use their mother tongue while living in a particular state or region, English plays an integral role because of this multilinguistic culture.

Imbalance of India's English Education

The Indian government recently approved a new National Education Policy (NEP) that has brought significant changes to the education system. One key aspect is the language policy advocating for instruction in the mother tongue or regional language. This has led to a strong debate about potential inequalities. The language policy suggests that students should learn in the mother tongue until Grade 5, instead of in English. While the NEP 2020 introduces a positive system, concern has been raised about whether it might possibly deepen class divides because of benefits to people who can afford private English-medium schools. Learning in the mother tongue may limit future opportunities, especially in English-based work or higher education. Although the policy suggests bilingual teaching methods, it remains unclear how this would be carried out and how it would be interpreted at the local policy implementation level.

Indeed, students from the Kerala Engineering College, the University of Kerala and the family members of the architecture CEO family I visited who are fluent in English, typically share a common educational background. They either went to an English-medium school or studied abroad. In these schools, they have to speak English, and there are fines for using Malayalam. In these schools, teachers use English for all subjects and all books and resource materials are in English. This English language preference continues in university, where students are used to discussing academic matters in English because the syllabus is also

in English. Moreover, even though they can communicate in English or Malayalam at the university, students stated that they prefer taking notes in English. The reason is lectures are taught in English, and their language ability allows them to write down points without the need for translation into Malayalam. For these students, I found that English is more suitable for acquiring professional knowledge. Conversely, when interacting with friends and family, they feel more comfortable using Malayalam. One interviewee noted that his reading and writing skills were stronger in English than in Malayalam but that speaking was more natural in Malayalam.

This bilingual environment helps them naturally adopt English as their main language without feeling stressed about it. For them, the main purpose of language is communication, so they focus more on using English effectively rather than getting everything perfectly right. This shows how their educational background has shaped their language habits and how they approach language use in their daily lives. Nevertheless, the levels of English in North India and South India are quite different. South India has several global companies in the region, and there is a demand for English in the workplace. This makes South Indians with good English skills highly competitive and able to increase their job opportunities. On the contrary, North India is influenced more by Hindi and views English as a language for more formal situations.

English role in Kerala public spheres

I interviewed students from the University of Kerala and office workers from a printing press company during this field study trip. Most of them were proficient in English and had grown up in an environment that is highly educated. However, through these nearly twenty interviews, I realized that whether their English ability is strong or limited, they cannot avoid using English in their daily lives.

During the field study trip, we explored places in Trivandrum, such as the LuLu International Shopping Mall, local supermarkets, St. Joseph's Seminary, and the Padmanabha Swamy Temple. These spots are important for daily needs and religious activities. What caught my attention was that, even though these places are mainly for locals, you can find a lot of English there. This includes signage, floor directions, and restaurant menus, all using English. In public spaces and the media, English plays a significant role in Kerala. It is commonly used in advertisements, signs, and public announcements. Also, in newspapers and on television, English is often present in local areas. This mix of languages is an interesting aspect of daily life in Trivandrum and shows the diverse linguistic influences. The pictures I am

sharing here show that English is used alongside Malayalam.

I also found that there are also interesting ways in which English is uniquely used in public spaces in India. In the two images below, we can see this unique usage. The first image was taken just outside the Trivandrum airport. The use of 'Assembly Point' is not common in native speaker English although the meaning can be inferred. The second image was taken in a shopping mall and shows the effectiveness of Indian English. Native speakers do not use 'Differently Abled Washroom' to describe the toilet for handicapped or disabled people. Our teachers thought this unique usage was even better than the language used by native speakers.

Conclusions

In my field study in Trivandrum, India, I discovered the important role of English in education, work, and daily life. Even though India has many languages, English holds a significant role, especially in education. People who attended English-medium schools prefer using English for studying and academic work. But as they talk with surrounding people, they can switch to Malayalam smoothly. In the bilingual environment of Kerala, where English coexists with the local language, diverse linguistic influences on the public and society can be seen.

Through numerous interviews, I unexpectedly made connections and friendships with Indian people. This experience made me realize that making friends is beyond national boundaries and allowed for more understanding of their language learning backgrounds. It opened my eyes to the close connection between language and culture, and how the diversity of languages influences our curiosity and friendships. Despite our different languages, cultures, and backgrounds, this project brought us together. This experience showed to me that people in India are extremely kind and friendly. It also reminded me how language can be like a special tool that helps us understand each other, even if we speak in different languages. I appreciate having this opportunity to research this diverse language context

and enjoyed sharing each other's unique stories and backgrounds in English. This experience taught me that English is not just about writing, listening, or testing, but it plays a necessary role in communication and understanding one another better.

References

Baldridge, J. (1996). Reconciling linguistic diversity: The history and the future of language policy in India. University of Toledo Honors Thesis. https://www.ling.upenn.edu/~jason2/papers/natlang.htm

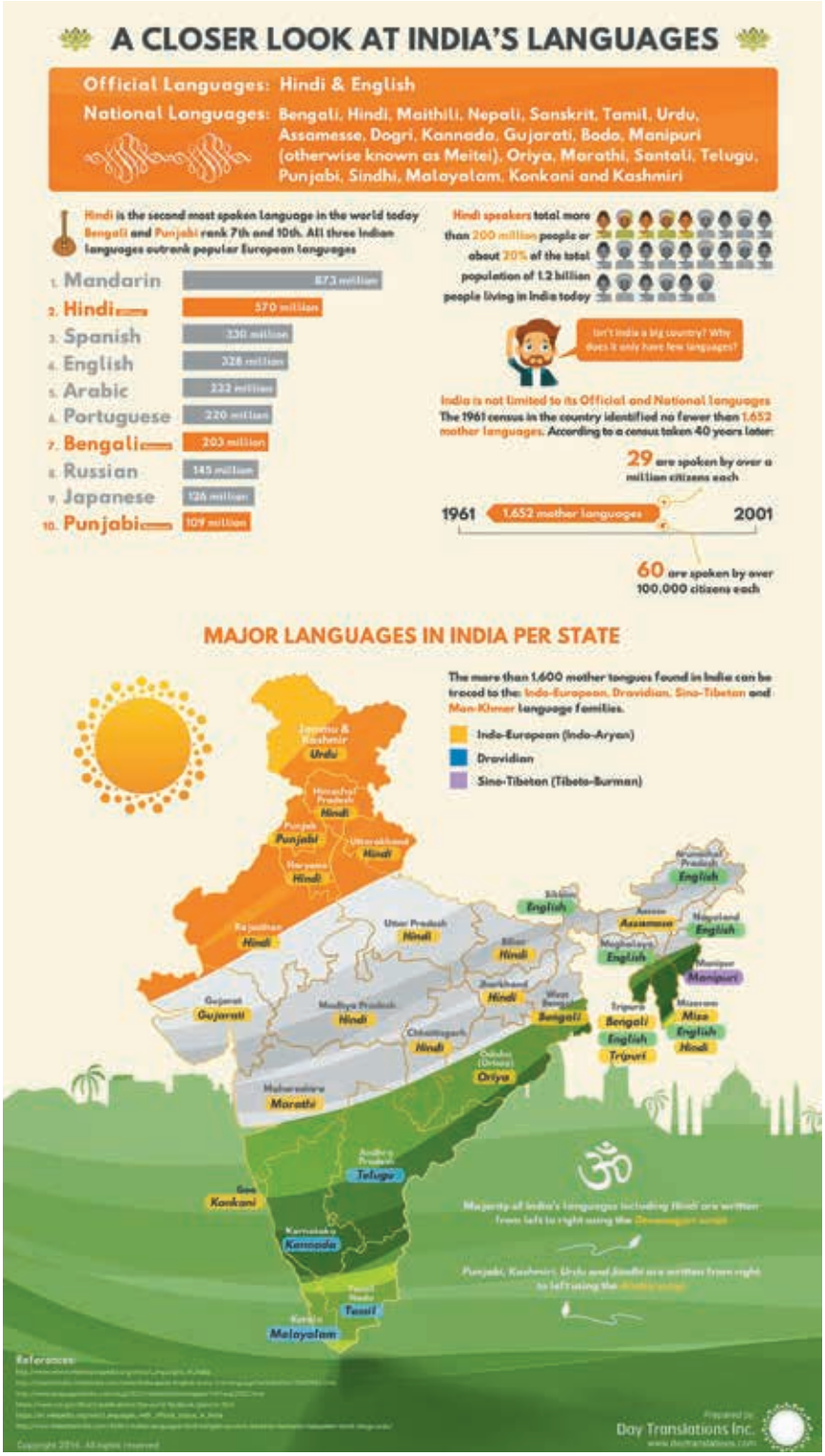
Rijo, M. & Sackett, K. (2018) Language choice and attitudes in education in Kerala community. Sociolinguistics and Language Development-LING470.

Murali, V.S. & Maiorano, D. (2020) Language barriers: Inequalities of India's national education policy. Institute of South Asian Studies.

Sreeknath, Y. (2021). English as medium of instruction at school level in India: Opportunities and dilemmas. Athens Institute for Education and Research.

Appendix 1: Infographic

https://www.daytranslations.com/blog/look-indias-languages/



香港スタディツアーについて

2024年2月19日から23日にかけて、香港においてスタディツアーを実施した。参加した学生は5名、引率した教員は2名（川本真浩・高橋俊）である。

香港で活動したのはこの5日間であるが、事前学習では教員がレクチャーを行った後、自らが何をテーマとし、何を調査するために香港に行くのか、香港で何を行うのかをじっくりと話し合った。また事後学習では自らの調査をまとめ、発表を行った。

香港は、今激動のさなかにある。1997年にイギリスから中国へと返還された後、一国二制度のもとでおおむね「現状維持」の政策が取られていたが、2014年のいわゆる「雨傘革命」以降、中国政府の対香港政策はより「中国化」を志向するものとなり、2020年に施行された「香港国家安全維持法」により、香港の「一国二制度」は事実上終焉を迎えた。

私は今回、約10年ぶりに香港を訪れたが、やはり以前に比べて「香港風味」が薄れているように思われた。名物だったネオンがなくなり、「普通話」がそこかしこで聞こえるようになった。以前はどこにでもいた日本人観光客の姿はほとんど見られず、一方で大陸からと見られる観光客がどこでも目についた。一方で、昔の香港の姿も依然として存在し続けているようにも思われた。

またもう一つの目的として、ローンボウルズを通じた交流がある。現地で長年競技に携わっているJohnny TSANG氏のご厚意により、会員制である香港フットボールクラブを見学させていただき、実際にプレーもさせていただいた。篤く感謝申し上げる。

ここでは、学生5名の報告書を選んで掲載する。ともに優れた報告書であると同時に、今後ますます変化するであろう香港の「2024年2月」を切り取ったという意味でも、貴重な記録であるともいえる。

参加した学生たちが、今後も香港への興味を持ち続けてほしいと願っている。そしてこの報告書を手に取った方々も、ぜひこれをきっかけに、香港への興味を持つようになってほしい。

（文責：高橋　俊）

香港スタディツアー

桑村　美咲

香港で有名な寺院である嗇色園黄大仙祠は道教寺院であるが、儒教と仏教の師や仏も祀っている。これは、「三教合一」という考えに基づいているためである。三教合一とは、儒教、仏教、道教の三教は、根本原理では一致するという考え方である。とはいえ、一つの宗教を中心においたり、上下関係を考えたりして、三教に優劣をつけていることが多い。例えば道教では、諸学統一を考えるうえで他の宗教を認めるが、その中でも完璧なものは道教であると考えていた。なお、「三教合一」は、「三教一致」、「三教同帰」、「三共一源」などともいわれる。また、現在中国大陸の道教施設の多くは、道教の神だけを祀っているが、香港では三教合一が遺っているという特異性をもつ。

次に、黄大仙祠の三教合一の在り方についてみていく。黄大仙祠は、1921 年に本堂の大雄宝殿や麟閣、事務所、寮、井戸などが建設され、1937 年に風水の関係で新しく建物が増設された。黄大仙祠の参拝は、9 本の線香を、3 か所に 3 本ずつお供えする方法である。1 か所に 3 本お供えするのは、世界の根源は天と地と人 (有徳の聖人) であるという、三才思想に基づくためである。参拝ルートは、黄大仙師・孫悟空を祀る大雄宝殿、観音菩薩・関聖帝君 (関羽)・呂祖師を祀る三聖堂、燃燈仏・韋駄天菩薩・仏教の四守護神を祀る盂香亭の順である。大雄宝殿では儒教を意味する「師」、道教を意味する「道」、仏教を意味する「經」の字が飾られていた。また、参拝ルートには入っていないものの、初期からある麟閣は、孔子とその 72 人の弟子を祀る建築物である。このことから、道教である黄大仙祠は三教に上下関係はなく、むしろ出来得る限り対等な関係としてみているように考えられる。このような対等なありかたは、黄大仙祠における特別なものなのか、香港では一般的にとられているのか疑問が残った。

＜参考文献＞

・嗇色園黄大仙祠「嗇色園黄大仙祠
http://www.wongtaisintemple.org.hk/ 最終閲覧日 2024 年 3 月 2 日
・Hong Kong Navi「黄大仙」
https://www.hongkongnavi.com/miru/60/ 最終閲覧日 2024 年 3 月 2 日
・香港年報 2022「Chapter7 Home and Youth Affairs」https://www.yearbook.gov.hk/2022/en/pdf/E07.pdf 最終閲覧日 2024 年 3 月 2 日
・溝口雄三、池田知久、小島毅『中国思想史』東京大学出版会、2007

香港 ST 成果報告

山口　明夏

初めに事前学習において、香港が 1841 年から 1997 年までイギリス領であったという歴史的背景から香港ではイギリス式の英語表記が用いられているという事を知った。英語という言語にはイギリス式英語とアメリカ式英語があり、これらは発音や綴り、単語などに違いがある。香港の英語がイギリス式英語表記であることを現地で調査する際に建物の階数表示を判別の対象として用いる。日本でも用いられているアメリカ式の階数表示は地上階を１階としてその後 2 階、3 階と表記するのに対して、イギリス式の階数表示では地上階をグランドフロア（ground floor）と表示し、その後１階、2 階と表示する。つまり日本で言う１階はグランドフロア、日本の２階は１階と表示される。この違いを用いて香港の英語表記がイギリス式の英語であるかを調査する。また、エレベーターをイギリス式ではリフト（Lift）というため、香港のエレベーターはどのように表示されているかも同時に調査する。

香港現地では宿泊したホテル、九龍公共図書館、香港中央図書館、香港空港、MTR の駅、重慶大厦、ショッピングモール、町の市場などの訪問した施設のほとんどで階数表示および案内図のエレベーターがリフトと表示されているかを調査した。スライド資料で紹介したように今回調査した全ての施設において階数表示はイギリス式が用いられており、地上階はグランドフロアと表記されていた。ここで１点注目したいのはグランドフロアは中国語で地下と表記されていたことである。日本と同じように地上階ではなく、地下と訳されていたのは印象的であった。しかしながら、香港中央図書館や九龍公共図書館は１階（日本で言う２階）がエントランスとなっており、文字通りグランドフロア（日本で言う１階）、中国語では地下のフロアは文字通り地下のような構造であったのも印象的であった。また、案内図やマップではエレベーターはすべてリフトと表示されていた。ただし、日立製作所など日本製エレベーターの注意書きには elevator（エレベーター）という表記が見られた。また、Subway が地下道を意味していたことは現地での新たな発見であった。アメリカ式では Subway は地下鉄を意味するが、イギリス式では地下道を意味する単語であり、香港でも地下道を指す言葉として用いられていた。

このスタディツアーを通して自ら調査し、香港に残るイギリスの影響を感じたことは非常に実感を伴った学習であった。また、想像していたよりもイギリス色が薄く、中国の文化や習慣が色濃い国であった。

現存する遺物から考える九龍城砦の歴史

岩佐　優希実

九龍城砦の取り壊し後の様子を確認、現存する遺物を調べることが目的であった。九龍寨城公園や展示室をから九龍城砦の歴史について調べた。

まず、九龍城砦について述べる。以前は犯罪が横行し、ひどい衛生状態であったとされる。しかし、内部には学校や美容院などが存在していたことから、九龍城砦の中で生活ができていたと考えられるだろう。イギリス軍による占領後、1994 年に解体工事が完了するまで、九龍城砦は不法占拠スラムと化した歴史を持つ。

九龍寨城公園内部には、実際に建てられていた南門の遺物や、清朝占領下の駐屯地の執務室として利用されていたヤーメンと呼ばれる建造物が残されていた。ヤーメン内部には実際の間取りや写真、その他発掘された遺物も展示されている。ヤーメンの内装は中国南部の伝統的な建築様式から設計されている。南門付近には取り壊し前の建物の小型模型と断面が展示されていた。内部まで緻密に再現され、航空機との事故を防ぐために建物の高さに制限があったことから、建物は一定の高さでとどまっていることが分かる。公園は住民の憩いの場が設けられている一方で、現在も城壁で覆われており、九龍城砦の名残を感じることができた。

以上より、現在の九龍寨城公園は憩いの場、九龍城砦の歴史を残す役割を持つことが分かった。今回は遺物に注目したため、今後は周辺地域の貧困率について考えることができると考える。九龍半島は香港特別行政区の一部であり、工業化も進む経済的にも発展した土地である。しかし、貧困率の高い地域として挙げられることもあり、「コフィン･キュービクル」や「ケージ・ホーム」といった狭い部屋で生活する人もいる現状である。よって、香港の貧困率について課題が残る結果となったため、今後も研究していきたいと考える。

香港スタディツアー

美濃　里沙

私は、「香港と日本の言語能力の違い」をテーマとして香港スタディツアーを通した探究活動を行った。香港渡航前は、広東語を使用した「香港ポップス」について事前学習を進めていたが、現地でのフィールドワークが困難であった為「言語」に注目したテーマに変更し、事後探求を行った。

香港は1842年からイギリスの領土支配が部分的に行われはじめ、同時期に言語の統制も行われ始めた。1842年からは英語が唯一の公用語とされ、1941年から日本の統治下になった際に日本語教育も行われたが1945には英国領土に戻った。そして1974年に中国語も公用語に加えられ、1997年に香港は中国に返還された。

現地で印象に残っているのは、現地の人が話す相手よって英語・中国語・広東語を使い分けていたことである。そのことを強く実感したのは2月22日に訪問した香港フットボールクラブでローンボウルズの見学や実技体験をした時である。香港を代表する選手が学生と話すときは英語、同伴する先生と話をするときは中国語、現地の方と接するときは広東語を使用していた。日本ではあまり見ることがないことだった為とても驚いた。

事後探求では香港人にとって「英語」がどのような立ち位置なのかということと共に日本の英語教育や英語能力について学習を進めた。事後探求で分かったのは、広東語が政府から公用語として認められていないことである。中国の言語政策としては、読み書きは中国語と英語、話し言葉は英語・広東語・普通語を加えたバイリテラシーやトリリンガリズムを目指している。広東語はあくまで方言扱いされている。また一方で、日本の英語能力はアジア圏の中でもとても低いことが分かった。特にスピーキング能力が低く、日本の英語教育に課題を感じた。

香港スタディツアー、事前・事後学習を通して香港のことを知れただけでなく、自身の言語に対する意識を上げることができた。言語学習は視野を広げるために大切であると考えた。

香港の転向貿易について

シン　暁霞

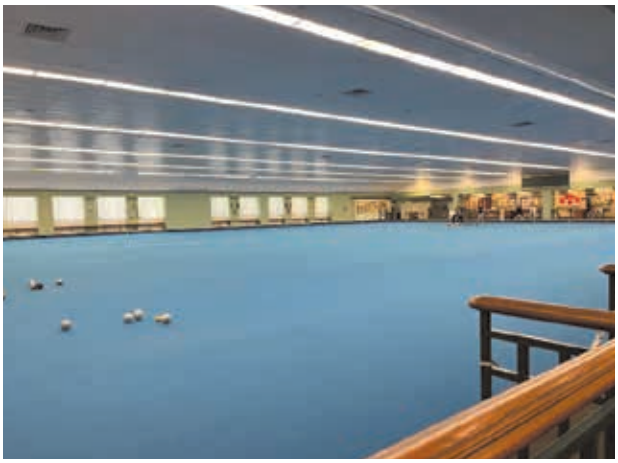
私は香港をキーステーションとした東南アジア向けの転向貿易（三点貿易）を行っている。香港へは仕事を含めて何度も訪れているが、近年の世界的な新型コロナウイルスの大流行により、4年近く香港に行く事が出来ず、今回のスタディツアーが久々の香港であった。香港の港で、私が利用している「OOCL」、「K-LINE」などのロゴが入ったコンテナを多数見た時は感慨深いものがあった。香港は国際都市であり、2023年の総人口は約750万人、東洋と西洋が出会う場所で、中国の伝統文化にイギリス植民地時代の影響が加わり、ハイテクな現代性と広東の活気が混ざり合うユニークな街である。

香港経済の特徴は自由貿易と低い税率、政府の介入が最小限なことである。香港は貿易額で世界第10位（2024年2月まで）に位置しており、その最大の貿易相手は中国本土。中国本土及びその他のアジア太平洋地域と強い繋がりを持ち、アジア有数の国際金融・貿易センターとなっている。

香港の転向貿易の規模は非常に大きく、2020年の転向貿易額は7兆香港ドルに達し、香港の総貿易額の約4割に相当する。香港の転向貿易の品目は多岐に渡り、特に電子機器（車）、電気機械、衣料品、玩具などの工業製品が多く、香港の転向貿易の主な相手国はアジア諸国（中国）、米国、欧州連合である。

転向貿易の歴史は古く、19世紀半ばまで遡る。当時、香港はイギリスの植民地であり、中国との貿易の中継拠点として重要な役割を果たしていた。1950年代以降、中国は西側諸国との貿易が制限された。しかし、香港は自由港としての地位を維持したため、中国と西側諸国との間の貿易の中継拠点として、ますます重要な役割を果たすようになった。1997年に香港が中国に返還される際、自由港としての地位が維持されることを保証された。今回、貿易商社の経営者にインタビューをした結果、香港は今後も転向貿易の拠点として変わらず重要な役割を果たしていくと感じた。私の事業もコロナでの落ち込みがあったが、昨年春から回復しつつある。

参考文献：https://www.jetro.go.jp/world/asia/hk/gtir.html
JETRO「香港の貿易と投資」（最終閲覧 2024.2.27）
https://m.yicai.com/news/2904356.html
「香港全世界最开放的自贸港」『第一财经』2013.8.1（最終閲覧 2024.2.27）



香港中央圖書館
HONG KONG CENTRAL LIBRARY

四樓
八樓
十二樓
三樓
七樓
十一樓
二樓
六樓
十樓
五樓
九樓
ALARM
DOOR
CLOSE

高知大学人文社会科学部　人文社会科学科国際社会コース
「2023年度　国際社会実習報告書」

2024年７月　発行

編集・発行　高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科
高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース
〒780−8520　高知市曙町 2−5−1
TEL　088−844−8425
FAX　088−844−8249
http://jinbun.cc.kochi-u.ac.jp/kokusai/
印刷・製本　株式会社リーブル
〒780−8040　高知市神田 2126−1
TEL　088−837−1250
FAX　088−837−1251